

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

5



第七十七卷 第五号 日本幼稚園協会

保育における社会性指導の決定版!!

保育専科 別冊

6月
発売!!

社会性指導のポイント

桐朋幼稚園 大場牧夫監修

定価600円

(保育専科6月号とも900円)

保育の中での子どもの社会性とは何か、またどのようなことに注意して、どのように育てたらよいか、保育実践から生まれた理論で詳細に解説します。図解による社会性を育てる遊びの紹介と実践例は保育にすぐ役立ちます。

内容

第一章 幼児の社会性の考え方と指導のポイント

保育の中でどのように社会性を育てたらよいか筋道をたてての解説

第二章 社会性を育てる遊び

幼児の興味や関心を向けさせながらの遊びの紹介

第三章 集団活動のいろいろ

当番や係などを通して社会性を育てる保育の紹介

第四章 集団生活の中の自立

ケンカやゆずり合いの中で育つ社会性をどう受け止め育んだらよいかの解説

第五章 社会性指導の実践

自由遊び、ごっこ、社会観察等、社会性を育てる保育の実践記録

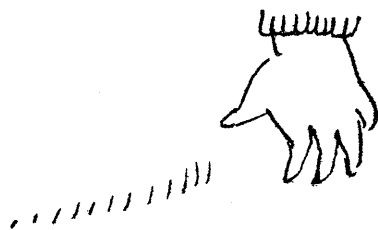


フレール館

幼児の教育

第七十七卷 第五号





12/18

幼児の教育 目次

第七十七卷 五月号

表紙 梶山俊夫
カッ ト 中島英子

日本の幼児教育の今日的課題……………南 信子(4)

空と草と……………和田 陽平(6)

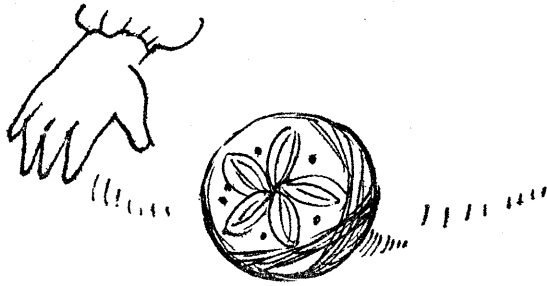
五月の天気雑話……………大後 美保(10)

幼児たちから学ぶかざかざのこと①……………丸山 ふみ(14)

★講演★ 食事はすこやかな性格をつくる……………稲垣 長典(16)

© 1978

日本幼稚園協会



私の保育.....松田 英子(28)

私の幼児教育論(その一).....下山田裕彦(34)

子どもと共なる日々.....高橋 洋代(40)

神さま? と空と.....神沢 利子(44)

四日市の空.....田口 鉄久(46)

空・草・芽.....村石 京子(48)

「経験」.....村田 修子(50)

大人になってゆく子ども.....津守 房江(52)

——「赤ずきんちゃん」をめぐって——

ニューヨークの中の日本人(その一).....佐藤奈美子(58)

——子どもの世界——

日本の幼児教育の今日的課題

南 信子

日本における幼児教育は、最近実にはさまざまな形で行なわれている。よび方も、保育、幼児教育、就学前教育等と、まぢまぢの異なつたいい方をし、その内容も、幼稚園教育、保育所の保育とわけられ、更に、ドロンコ教育、ハダカ教育、英語教育、スバルタ教育、通信教育等、多種多様な形で行なわれているのが実状である。その他、体育教室、音楽教室等、家庭以外の幼児を対象とする教育にかかわる施設は花ざかりといつてよい。

又過去三十年來論じられてきた、自由保育、一斉保育にも、いまだに混乱が見られる上に、最近はや、オープン・システム、ゴール・フリーエデュケーション、モンテッソリア法等の影響を受けてか、たてわり保育といったよび方による方法も一部で盛んとなり、現場にある保育者も又混乱の中にあるのではないかと思う。

一方、最近特に多く発見されてきた障害をもつ幼児の為の教育も、普通児と共に教育するのがよいか、特別な施設の中

で考えるべきであるのか、いずれにせよ、社会のそのような要求にも応じなければならぬ実状である。

更に幼児の教育は、次の段階の小学校教育との関連において考えるべきであるが、幼稚園、保育所から小学校に対する要求、小学校から幼児教育に対する要求として、種々のことがあげられるだけで、一貫した教育体制の中で取扱うことをせず、その為の適切な方策が講じられていないように思われる。

このような、多くの幼児教育にかかわる課題と、多様化の中で、日本の幼児教育が、その道をふみあやまることがないよりにと願う心は切実である。現代は、民族も個人も、世界をはなれて生きることは不可能であり、画一化されることも又不可避である。真の自由の中で、主体的にしかも確信をもつて歩むことが迫られているといえよう。私はその意味で、幼児教育が正しい方向をめざすために、次の二つの点を指摘、強調したいと思う。それは私自身の反省でもある。その

一 つは、

(一) その教育は、ほんとうに、ひとりひとりの子どもを中心に考えられているのか、という視点である。

漢字教育、英語教育というが、子どもが中心であるというよりも、漢字や英語が中心に考えられているようにも思われる。ハダカ教育、ドロッコ教育、スパルタ教育も、或特定の人の教育観が中心にあるのではないかと、考えたくなることも多い。更に園児獲得の為、地域の社会、父兄等の要求に左右され、それに迎合し、その園の特色をもたせるに都合のよい方針や内容を取りいれているのではないかと思ひ、暗たんとした思いにさせられるのである。どこまでも、幼児教育は、ひとりひとりの子どもを中心として、その全人的、総合的な成長発達が考えられなければならない。

(二) 今一つの視点は、目標が、幼児教育の本質にそって、はつきりかかげられているのか、どうかである。

多種多様な方法で行なわれるとしても、何よりも重点をおくべき、優先すべき、又中心におくべきことは何か、それが明らかでなくてはならないのである。めざす人間像があり、幼児の発達課題が明らかにされ、生涯教育における幼児期の

教育の重要性が認識されてこそ、幼児教育が可能であり、内容や方法の自由がゆるされるのである。

百年の歴史をもつ日本の幼児教育は、私学が非常に多く、統一もなければ、共通理解も少なく、よい意味では、私学の自主性に支えられて存続してきた結果、このような多様化をうみだしたともいえよう。学校教育の中にいれられたとはいえ、設置にあたっての審議には、その内容まで拘束されることは非常に少ないのが現状であり、指導者の幼児教育に対する専門家としての養成が急務である。又最近、諸外国の幼児教育が紹介され、情報過多の中で、世界の波にまきこまれていく感も少なくはない。それだけでなく、有名無名の学者、教育者のイデオロギーによるものから、教育観のはっきりしない企業家による施設等も少なくはなく、選択する両親の幼児教育に対する正しい認識を啓発することが、先決問題であるとも考えられる。いずれにせよ、日本の幼児教育は世界にはこり、世界を指導するに足る状態ではない。多様化の中で混乱の中にあるといつてよい。このような時代に、幼児教育の専門家として果すべき役割の重大さを痛感するものである。

(北陸学院短期大学)

空と草と

和田陽平

空

私は横浜に生れて、育った。今の野毛山公園の、もう一つ裏の山に当る所で、当時は西戸部町字山王山といった。山王山という高台の原っぱがあり、大きな松が何本か生えていて、昔は山王様を祭った小さな祠があったそうである。東の端の檜の木に昇ると、遠くに港の海が見えた。

或る夏の夕暮時、幼い姉と私は、この原っぱに並んで、西の空を眺めていた。遠い笹原の彼方、地平線には夕映の茜色が残っていて、丹沢の山並の輪郭が黒く見えた。

お日様西にかくれて

宵の明星顔出した

あっちの方にもピーカリ

こっちの方にもピーカリ

出てくる出てくる星の数

二人で、こんな歌をうたった。出てくる出てくる星の数。

遠い昔、横浜の空にも、降るように輝く、無数の星が見られた。

草

夕飯後に、父と母は幼い私達兄弟を連れて、よく散歩に出た。山王山の家から、税関官舎の脇を通って、伊勢山の切通しから野毛坂を下り、伊勢佐木町まで歩いて行く。切通しの坂には青白い瓦斯燈が灯っていた。

当時、横浜の唯ひとつの盛り場であった伊勢佐木町には、いくつかの活動写真館もあった。滅多に活動写真を見ない父は、或る時、ふと気を変えたか、散歩の途中で、私達を連れて、記念電気館という名の活動小屋に入った。亀柴せいべいの反対側の横町を一寸入った角のところに在ったが、今はもう、とうの昔に跡形もない。

その時に見た写真は『細川血達磨』という芝居で、火事のなかでお侍が腹を切るといふ、世にも恐ろしい光景を、入った途端に見た幼い姉と私は、仰天して、わっと泣き出し、困り果てた父は二人を裏の廊下に連れ出した。

廊下の窓から下の往来を見下したら、夜店の植木市が立っていた。アセチレン瓦斯の光に照り映えたゼラニウムの朱色や淡紅色の花は、泣いたあとの眼に、妖しく鮮やかに見え

た。

今でも、ゼラニウムを見るたびに、不思議にその時のことを思い出す。

空と草と

中学を卒業すると、私は遠い伊予の松山の高等学校に入った。松山は漱石の坊ちゃん土地であり、学校は松山の町と、道後温泉の中間の、田圃のなかに在った。学校の近くの石手川のはとりには、晩春ともなれば、ニセアカシヤが白い花房を、枝もたわわに咲かせた。四国八十八箇所の札所である石手寺の、古い山門の脇では、焼き大福を売っていた。学校のグラウンドにはシロバナタンポポが咲き、ニワセキシヨウー南京あやめーの小さい花が一面に春風に揺れ、そら豆ほどの大きさの雨蛙が飛び跳ねた。要するに大変のどやかな風景ということである。

学校で、私の一番気に入りの場所は、植物園と称する、芝生の間に花壇のある所であった。花壇には浜菊、金盞花、飛燕草、矢車菊など、さまざまの花が咲いたが、幼い頃、私の

家の庭に咲いていたナスターシャムも咲いていた。和名のノウゼンハレンは、花がノウゼンカズラに似て、葉が蓮の葉のように丸いからである。芽は食用になるそうだが、私は試みたことがない。葉を千切ると独特の青臭い匂いがあり、それを嫌う人もあるが、私にはそれが何とも懐しい。幼い時を思い出すからである。ものの匂いほど、昔の記憶を呼び起すものはないのではなからうか。

私はその芝生に寝そべって、ワイルドの喜劇などを耽読した。私は今でも、あの『アーネストが肝心』そのほかの四編の喜劇は正に天才の作品であって、名ばかり高いドリアン・グレイの絵姿などより遙かに上等だと思っている。

ノウゼンハレンは朱、橙、黄の色とりどりの花を咲かせ、辺りには絶え間なく、微かな虹の翅音が聞えた。ワイルドから眼を放せば春の空に浮ぶ綿雲が見えた。それはまさしく、人生の取り留めのない楽しみであった。要するに、私は E. E. Boy であつたということである。

空と草と

富士山は、どこから見ても美しい。池大雅も葛飾北斎も、横山大観も、梅原竜三郎も、いろいろな富士山を描いた。田児の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ、駿河湾から眺めた富士は素晴しいが、反対側の山梨県から見た富士も、別の趣きがあるようだ。

甲斐がねや穂蓼の上を塩車

蕪村

この甲斐が根は富士山のことだと、私は思っている。山国の風景が見事に描かれていて、これは矢張り画家の句であると思う。だが、私の一番好きな富士は乙女峠から見た富士山である。

昭和のはじめの或る秋の晴れた日、急に思い立って唯一人、御殿場の駅から、乙女峠の細い坂道を昇った。峠の上から見た富士は、湖や山などの余計な添景は何もなく、それはただ胸のすくような、大様な姿であつた。金時山まで続く尾根の草原には薄紫色の松虫草が一面に咲いていた。

当時は不景気のどん底で、まして心理学のような浮世離れた学科を敢えて選んだ私などは、卒業後の見通しなどは全く立たない有様であつた。若いという字は苦しみに似ていると

いう、あの流行歌の文句のように、いつの時代の若者も、自分こそが最も苦難の時代に在ると思ひ勝ちである。私は松虫草の咲き乱れる草はらに、仰向けに寝転んで、澄み渡る秋空を眺めながら、鬱鬱と人生の行路に思いを致すのであった。

空

月天心貧しき町を通りけり

蕪村

蕪村の数多い佳句のなかでも、この句が特に好きである。

秋の句には違いないが、私にはどうしても冬に感じられる。

昔——五十年近くも前ならば、昔といつてもいいだろう

——大森海岸に沢田屋という、大変安い蟹料理屋があった。

渡り蟹——ガザミーの専門店で、店の裏には捨てた蟹の甲羅が見上げるような山になった。その頃の東京湾は渡り蟹の名産地であった訳である。暮も押し詰った寒い日であった。

この店からの帰りに、どう夜路を間違えたか、いつの間にか、見たこともない寂れた町外れに出た。歩いている私の真上には冴え返る冬の月があった。たゞ暗く、黒く、静まり返

っている両側の低い家並に挟まれた狭い路は、一筋に白じろと見通せた。海の近くらしく、路には無数の細かい貝殻のかけらが散り敷いて、月あかりに白く光って見えた。しんしんと沁み入る寒さのなかで、卒然と、私は蕪村の月天心を想い起した。

*

*

から鮭も空也の瘦も寒の中

芭蕉

狂句 木がらしの身は竹斎に似たるかな

芭蕉

狂句は前書か、句の冒頭かという議論を、どこかで読んだ記憶があるが、私には、どちらが本当でも構わない。この形の方が好きだけである。私も年をとった。人生の冬ともなれば、このような句に殊に心を引かれるようである。七十年の来し方を振り返れば、

月天心貧しき町を通りけり

闇夜でなかったのは仕合せであった。

(明星大学)

五月の天気雑話

大後美保

八十八夜

五月の声を聞くようになると、子どもの頃によく歌った「夏も近づく八十八夜、野にも山にも若葉が茂る、……」という歌と同時にその頃のことを懐しく思い出される。寒さから開放されて思うぞんぶん遊ぶことができるようになるのが何よりも嬉しかった。

八十八夜は、徳川時代に幕府の天文方の安井春海が、京都を中心とした日本の土地にあった最初の暦である貞享暦を作ったさいに二百十日などともに雑節の中に取り入れたのである。八十八夜を取り入れたのは宇治の茶園で霜除けをとる時期がだいたい八十八夜のころであり、多くの農家でもこのころが霜とのお別れで、あまり霜害を受けなくなるからであ

る。八十八夜が暦に取入れられてからは、八十八夜の別れ霜、あるいは忘れ霜などといわれ、農家ではこの日を種まきや植付の時期の目安として利用するようになった。これについて八十八夜はこの日を過ぎれば霜害を受ける目安としてはなく、丁度その頃に大霜害を受けやすいから注意を喚起するためにいわれたのだという説もある。これはたまたま五月の初めに霜害がよく起り、この頃に霜害を受けると被害が大きかったのでこうしたことがいわれたのである。

霜害を恐れ八十八夜待

虚子

八十八夜は立春から数えて八十八日目当たる五月二、三日で、八十八という日を選んだのは特にこの日に霜が降りるからではなく、語呂がよく覚えやすいからで、夜としたのは夜に霜が降りるからであろう。語呂がよいために歌にもなり、多くの人に親しまれた。

実状はどうかというと、現在の京都の平年の終霜日は四月十九日であるから八十八夜よりかなり早く霜が見られなくなり、現在ちょうど八十八夜頃になると霜が降りなくなる地方は、中部山岳地方や東北地方と北海道南部の平地地方である。徳川時代に関東以西の地方で八十八夜が忘れ霜の時期として適用したのは、この時代は小氷期で、現在よりもかなり寒かったからで、その寒さは、冬に関西の各河川が凍結したり、和歌山県下辺まで北海に棲むトドが南下していたことなどからもうかがうことができる。

明治から昭和にかけて終霜日がどのくらい早くなったかを、明治十九年から昭和十五年までの五十四年間の平年終霜日と昭和十五年から昭和四十五年までの三十年間の平年終霜日と比較してみると、後者のほうが福岡では十三日、京都では十二日、東京では八日、仙台では六日、それぞれ平年終霜日がおくれ、気候が温暖化していることがうかがえる。

ただこれをそのまま気候の温暖化といえない点もある。それは、近年、都市が発達し、都市内でのエネルギーの消費量が増加したために都市には都市特有な気候が形成されるようになってきた。多くの気象台の所在地も都市化の波にのみこまれ、周囲に家が建ちこみ、こうした環境のちがいが終霜日

にも大きく影響するようになってきた。これは郊外にくらべて都市内の結霜日が以前よりも早くなったことからもうかがうことができる。

五月晴れ

五月に入るとまもなく立夏で、日ごとに日射が強くなるのを覚え、気温のあがりかたは北の地方ほど速い。日最低気温についてみると、十日間に鹿児島では〇・九℃高くなるのに対し、札幌では一・四℃も高くなる。

暖気の北上にもなっているいろいろな花の花前線が北上し、しだいに新緑が深くなり、「目に青葉、山ほととぎす初鰯」という季節となる。

五月の気温は、秋の九月半ばから十月半ばころの気温と同じで、寒くも暑くもないよい季節という点ではちがいがなが、五月は気温が上り坂にあるために、秋とはちがった活気や喜びを感じる。

五月のうちでも五月晴れの日はとくに心地よい。古い書物を見ると「五月は悪月」としているものが多い。これは昔は陰暦が使われ、陰暦の五月は太陽暦の六月に当り、六月は梅

雨期で天気の良い日が多いからで、昔の五月晴れは梅雨期の合間の晴れ間のことであつたのである。それがいつのまにか、太陽暦の五月の天気の良い日を五月晴れというようになった。かつてはこれはまちがいであるからと反対する人もあり、しいていうなら「五月晴れ」といえばよいと主張する人もあつたが、ごがつというよりさつきというほうが語感がよいために、今では五月の晴天を五月晴れというのが気象のほうでは公認されている。したがつて梅雨の晴れ間は五月晴れといわないで梅雨晴れという。

五月晴れというといかにも五月に晴天が多いように思われるが実際はそうでない。多くの地方は四月の降水日数と同じか、五月のほうがかえつて一、二日多い。ただ雨の降りかたが四月の頃とちがつてくる。五月は前半に晴天が多く、後半に雨天が多く、したがつて晴天がまとまって見られるので、とくに五月晴れとよばれるほどの晴天が見られることとなる。五月に入ると大陸の高気圧の勢力が弱くなるにしたがつて、その一部がちぎれて日本のほうへ移動性高気圧となつてしばしば流れてくる。しかもこの移動性高気圧は早春のものより大きく、時には次ぎ次ぎと並んで移動してきて、帯状高気圧になつてしまうことが多い。こうしたことから晴天が

続くこととなる。また日本を通り抜けた移動性高気圧が東太平洋上に居すわつて、日本付近が南高北低の夏型の気圧配置のようになる、この場合にも晴天が続くこととなる。

また五月前半には、移動性高気圧の中心が日本を通り南方海上に出た後で、この高気圧のために、日本の南岸沿いに前線ができて、この前線沿いに低気圧が移動してきて、雨を降らせることもあるが、この場合の雨は長続きしない。こうしたわけで、五月の前半には五月晴れが見られやすい。

走り梅雨

梅雨の入りは暦の上では六月十一、二日だが、この日より十日も二十日も、前の頃から天気がぐずつてあたかも梅雨に入ったように思われる天気となることがある。これを走り梅雨、梅雨の走り、梅雨の前ぶれ、迎え梅雨などという。現象は同じだがニュアンスは多少ちがう。走り梅雨、梅雨の走りにくらべると、梅雨の前ぶれ、迎え梅雨は入梅に一層近づいてからの雨とみたほうがよさそう、五月末から六月の上旬にかけての雨である。

また走り梅雨のことを卯の花腐しもいう。ウノハナとは

ウツギのことで、ウツギの花は多くの地方ではだいたい卯月（陰曆の四月）に咲き始めるので卯の花を腐らす雨という意味と、また移動性高気圧が太平洋に抜けた後で吹く湿気を含んだ東風を「くだし」というので、この意味も含ませてこのようによんだのである。今ではあまり使われないが、いかにも日本らしい発想による名称の付けかたで、五月晴れのように残したい季語である。

ウツギは高さ一―二メートルになる落葉低木で、白い花が咲き、田畑の境界などによく植えられていた。天候の影響を受けやすい農家ではウツギの花の咲きかたを見て梅雨の降りかたを知る手掛りともしていたようである。

そのためか、ウツギの花の咲きかたから夏の天候を予想することわざとして「卯の花が枝の先に多く咲けば日照り」「卯の花が根元に多く咲けば風雨多し」「ウツギの花に白花多きは雨多き兆」などと各地でいわれている。

ウツギも改良されて、ヤエウツギ、サラサウツギなど美しい花が群がり咲くものがあり、これは都会でもかなり見受けられることができる。私の家にも二、三種のウツギがあり、この花が咲くころからいろいろな花が咲きだし、一年のうちで庭の眺めの最も美しい季節となる。

走り梅雨があるかないかは都会の人にとってはそれほど問題でないかもしれないが、農家にとってはきわめて重大事である。走り梅雨が盛んに降ると、病虫害が多発して、大減収となることがある。この著しい例は昭和三十八年である。この年は梅雨の走りがいちじるしく顕著で、連日のように雨が降った。

毎日のように雨が降ったから、農薬を散布しても効果がなく、麦類には赤かび病などが大発生して、明治以来の大減収となった。四麦総収穫高は前年度の僅か二五・七パーセントで、高知県では前年度の七・五％という大凶作となった。

梅雨の走りが顕著なものも困るが、梅雨の走りの全く見られない時にも灌漑用水が不足したりしてひどい時には干害を受けることとなる。梅雨の走りは、その年の本格的な梅雨を占なう示標ともなる。

本土では五月の雨を梅雨の走りとみることができると、琉球や南西諸島では、梅雨の走りも入りも早く、五月のうちに雨期に入ることもあり、これを夏ぐれとよんでいる。

（成蹊大学）

幼児たちから学ぶ

かずかずのこと①

——水色のノートから——

丸山ふみ

はじめに

編集部から「保育の中で出会ういろいろなことを書いて……」というお便りをいただきましたのは昨年末のことでした。それからしばらく迷いましたが、伊勢富士と呼ばれている堀坂山が園庭からみえる幼稚園で幼い日を過ごす三百余名の幼児たちが、私共十三名の保育者に教えてくれる数々のことをメモしている水色の表紙のノートからまとめてみることで、自分の保育者としての仕事の反省にしたいと心にきめました。

幼児の眼

曇りのない幼児の目にうつる大人の生活を彼らは独特の

判断をもって自分たちの世界に再現しようとする”（『小さい者の声』柳田国男著）

私はこの一節が大好きで、幼児の視線をうけたり、幼児が何かをじっと見ている姿に出会ったりするたびにこの文が心の中に浮かぶことが多くあります。

四月なかば頃、入園当初のあわただしさがしだいに消え、園内にや々と安定した時間がやってきたと思いつつ職員室の前に立って園庭をみていますと、年長児になったみな子と和子がそれぞれ両手をくっつけた掌一杯桜の花をもって園舎裏からやってきました。

園舎裏には桜の木は三本あるのですが、いずれも樹齡が若くてまだ数多くの花をつけるまでにはなっておりません。

まして花を捨てるような場所ではないので二名の女兒の嬉しそうな表情に反して、「まあ、きれいな、どこにあったの」と聞いた自分の声のひびきには優しさがありません。

しかし、みな子はさわやかに、「あんな、おいてあったん。そやけどもう園長先生の分はあらへん（無い）」と私の顔に、私の気持とは別の世界の人のような視線を投げて、砂遊び場にいる担任のところへ走り去っていきました。

「あんな、おいてあったん、そやけどもうあらへん」と幼児の口調をくりかえしながら園舎裏へまわってみました。

園長というのは、なかなか毎日の保育全体の流れの中で自分の占める位置はなく、幼児からかかわってくれるのを待ったり、それぞれの先生の計画からはみ出している幼児たちをその組の活動へ誘導していくことで自分もまた研修しているのだと考えています。

この日も、保育者として幼児と同じ目の高さでものを見なければならぬ、幼児は常に下から見あげており、大人は上から見おろしていることを自覚しているつもりでも失敗したのです。

桜の枝が一本折れていたのです。だから、まさしく置いてあったのです。きつといつも頭の上に咲いている桜の花が、草の上にあったのですから、きつとふたりに摘んだのでしょう。その枝の落ちていた場所に自分がしゃがんでみて幼児のあの嬉しそうな眼がわかったのです。

幼児の生活から

じゃんけんしようと言葉での提案が年少児でも早くから出

るようになったけど、さて、じゃんけんになると石とはさみがあやふやでトラブルがおこる。石とはさみを自分では意識しているけど指に力が入っていないと、四歳児担任のA先生が嘆くと、M先生が私も今日失敗したのよ、ぶらんこに乗っている安代ちゃん後から押したらね、しっかり握っていないかっただのね落してしまっただのよ等々、幼児が帰ったあと幼児たちのことが話し合われる。

幼児から学ぶことで保育者として成長していくといわれませんが、幼児は実にいろいろな問題を提供してくれます。それは教育課程を編成していく上できわめて貴重なことだと思っています。

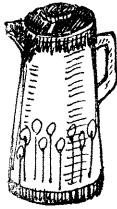
早くから鉄が使える四歳児の久司は担任が「何ができるの」とたずねたら「ほこり」と答えて担任をがっかりさせました。

幼児が生活している家庭や地域社会が変わっていくなかで幼児たちの心や身体の発達も変わっており、変えることが良いのか悪いのか、失敗した実践や、園内でよかったねと喜びあったことに御批判や御指導を皆様からいただきますようお願いいたします。

(松阪市立松江幼稚園)

★講
演★

食事はすこやかな性格をつくる



(一九七七年六月七日に幼児教育
現職研究で行なわれた講演より)

稲垣長典



若さの秘訣三つ

只今、津守先生から、非常に御丁重な紹介をして頂いたんですが、確かに私はもう古い。お茶の水じゃ、一番年を取っていることになると思うんです。実は、私は昭和二十五年の家政学部が独立する時からずっとこちらにおりまして、もう三十年近くです。本学の定年は六十五歳。来年、私は定年の年です。そういう意味で、一度しゃべらせたい方がいいだろうと言うことで御指名にあずかったんだらうと思います。

実は、昨年、家政学部の忘年会がありまして、その時に、少し皆さんお酒が入っていたせいか、稲垣先生は、年の割には若く見える。どうしてそんなに若く見えるかという事になりました。その時若さの秘訣というか、私の信念というものを、三条件お話しましたら、他の学科の先生はあま

り感激して下さいませんが、児童学科の先生方は非常に感激して下さいました。そのことも、ひとつあったんじゃないかと思えます。

どういふことかと言いますと、若さの秘訣には三つある。ひとつは「オネスト」(Gongxi)だと。正直であると言うこと。

これはどういふことに通ずるかと言うと、例えば、不正直であると言うこと——これは、そんな大袈裟な不正直でなくて、例えば六時半に会おうと言うことで約束した時に、約束通り行かないと、向こうの人に対しては不正直になると。私なんかは、時間には非常に神経質で。その逆に、時間守らない人はあまり好きではありません。

それで宴会なんかでも、六時から始まると言う時には六時前に来ているというのと、まあ我々の宴会というのは、大抵、お酒が出ますが、その六時までに来た人が損をしないう宴をしろと言うのが、私の主張で

す。それはどういふことかと言いますと、六時までに来た人は、六時になったら、酒は飲み出していいんだと。その変り、御馳走は食べてはいけない。六時半に来る人がいて、全員そろった時に、さあ開会しよう。遅れた人が得して、早く来た、きちんとした人が損をするようではいけないと思います。ですから六時から来た人に酒は飲ませるといふシステムがいいじゃないかと思えます。

これは沖繩システムと僕は言っているのですが、沖繩に出張した時に、大体、沖繩では、コココーラと泡盛を混ぜて、コーク杯(黒杯)と言つて乾杯するんですが、これは時間通り来た人は、もう飲み出している、そのかわり、おかずは皆がそろつてから。

オネストは、そういう小さなことでも時間を守ることがひとつであるし、不正直な行動をとると、これが、だんだん重

なって、心配事が増え、白髪が増えると言うのでオネストをひとつ掲げた。

それから、もうひとつは、日本語で言わない方が良くて、「ナイス・パートナー」(Nice partner)と言つたんですが、良きハズバンド(Nusband)を持つ、良きワイフ(Wife)を持つ。それから、独身の方は良き友達を持つと言うことで、ナイス・パートナーを持っているという事は、若さの秘訣になるんじゃないかと言うことです。

それから、もうひとつは僕の専門ですが、「ニュートリション」(Nutrition)いわゆる栄養の問題、いわゆる食べ物の方に頭を使うという事で、この三つを守るんだと言う話をしましたら、まあ、おもしろいという事で、そんなような話をしろということだと思えます。

で、そこで、今三つ掲げましたのは、後で考えてみると、WHO(世界保健機構)という機構が国連の中にありますが、WH

Oが最近、健康というものの定義をしている。その定義を見ますと、肉体的健康、社会的健康、精神的健康、この三つがそろったのが本当の健康であると言っている。

今までは、身体の状態だけがいいのを健康と言っているが、今では、それだけでは駄目だと。例えば、非常に頑健な人も、社会的に人を困らせたり、公徳心が無い状態の者は健康でないと、それに精神的に不正直なもの健康でないと、健康の定義をしている。

そうしますと、先程の三つの条件というのは、これにびったりするんです。肉体的というのは栄養、社会的というのは、ナイス・パートナー——いわゆる良き友を持つということ。それから精神的というのはオネストということで、そういうような意味で健康であるということは、精神的にも健康でなきゃならないことになります。

体格ばかりでなく

顔の表情をつくる食事

そこで最近、私は時々感ずるんですが、電車の中で見る光景ですけれど、若い奥さん、お母さんが、子どもを連れている時に、子どもの躰というのは、何か自由と言うのを間違えたようで、怒らないというか。この間も、ちょっと感じたのですけれど、空いた車内でしたが、子どもが窓を見ているのに、靴をはいて上って見る。ところが、お母さんは、その子の靴を脱がせようとしないう。

私が年寄になったから、こういう感じを受けるのかも知れないけれども、いわゆる身体障害者とか、老人用の席を、若い人が平気で座っている。私は、他に空席があれば、そこには絶対腰かけない。やはり、ああいうふうに書いてあったら、それを守る

という気が起らないのかと思います。そういう人を見ていると、子どもの教育に対して、子どもをいい大学に入れるという、いわゆる教育ママ的なものは、本当の教育ではないと思う。

そこで僕の専門になるんですが、これからちょっとスライドを御覧に入れますけれども、いい食べ物、それは、金がかかっているとかいうことでなくて、いわゆるパランスのとれた正しい食べ物を食べている子どもと、食べていない子どもでは、もちろん体格が違う。これは表面的な問題ですが、顔つきが全然違うんです。いい食事をしている子どもの顔つきと、偏食というか、かたよった食事をしている子どもの顔つきというのは違うということを、スライドでちょっとお見せします。

これは五歳の女の子の写真です。これを見て、次の五歳の男の子の写真と比べて見ますと、顔つきも非常に健康的で体格もい

い。次に、同じ五歳の男の子でも栄養不良の子だと、体格もやせている。顔つきも、じいさん臭いし、あまり、ほがらかな顔をしていないのです。

次のスライドは、これは、典型的な体格、姿勢もいいし、これも栄養のいい人。次は同じ年代ですが、小さな老人型。やはり、子どもでも顔つきから、しまりがな

い。今の栄養は、必ずしも、大きく育てるということではなくて、やせていても肥り過ぎていても困る。何と言っても中間が良い。これは、それぞれ兄弟。同じ兄弟でも太っている子もできるし、やせている子もできる。これは中間がないやせとでぶ。

次は、これは年齢の同じ子ども。真中の子どもは、体格もいいし、顔つきがびりりとしている。が、両端のは、顔つきもゆるんでいる。同じ年でも体格が違います。が、第一、顔つきが非常に違うということ。

そこで、今御覧になったように、体格だけがいいのが、健康であるというのではなく、顔つきというか、いわゆる表情も、良い栄養を取っている子は、非常に、きりっ

としていくということです。先年、私、アメリカに行きました時、非

行少年収容所を訪問したことがあります。

そこで、その所長の言われたことが、非常に感動的でした。そこに入って来る非行少

年を良くするという時には、もちろん規律

正しく、精神力で直すことをするが、それ

より、まず第一に、彼等が今まで、どうい

う物を食べていたかということを調べるん

だということ。食べている物を調査して、

良く検討してみると、何かバランスのとれ

ていない食べ物を食べていることを発見す

るのだそうです。

その時に、その否定の物を加えて、食事

の矯正をする。そのことにより、非行少年

の性格を変えることができるということ

言われた。これは全く、食べ物で、性格を変えるというような考え方。即、いい食事をしている子ども達は、素直ないい性格をしていると考えられる。

で、こういうことに対して、人間で実験

するということは、なかなかできない。ど

うしてできないかという、人間は理性が

ありますから、表面的に理性で押していま

す、本音が出て来ない。人の場合でも本音

が出る場合がある。いざという時に、突発

事故が起きるとすぐ本音が出る。そういう

時が一番良くわかる。

しかし、動物実験をすると、はっきりわ

かる。理性が無いから、そのまま出る。

例えば、私が年の割に若いと言われてい

るが、突発事故の時には、もう全く年寄に

なってしまう。というのは動作——例え

ば、ゴーストトップの信号の所でスタートを

起こす。ところが、途中でストップがかか

る。その時早く渡ろうとする。その後姿を

見ると全く年寄風。生活でも、おそらく突発事故で本音が出ると思います。先程申し上げましたように、理性があるから、なかなかポロを出さない。

だけど、動物を飼っていると、これがもうすぐ出て来る。それが一番良くわかるのは、ビタミンの欠乏という問題なんですけれども。

栄養のバランスのくずれ

——ビタミンの欠乏

まずビタミンAの欠乏についてみます。動物実験というのは、我々は一匹ずつ一つのカゴに入れて、欠乏飼料を与えて、最初は、毎日体重を測ります。そのために手をつっ込んで、動物をつかみ天秤にかけます。白ねずみはおとなしい動物ですから、自由に測らせてくれる。ところが、だんだんAの欠乏状態がひどくなって来ますと、

手を入れただけで、かみついてくる。非常に、狂暴になってくる。そういうカゴの中に同じ正常なネズミの仲間を入れると、正常なネズミを食い殺して、はらわたを食べる。いわゆる一番ビタミンAの多い所を食べるということも観察できる。そういうふうに、ビタミンA欠乏の動物は非常に狂暴になる。

ところがビタミンBなんかだとまた別です。Bにはいろんな種類がありますが、B₁、これは『細雪』にもありますように、「B足らん」と言って、たるんで来ます。白ネズミだと非常に良くわかります。動物は敏捷ですから、健康な時はカゴの中をちょこちょこ歩き回ります。だんだんB₁が足りなくなってくると、寝てばかりいて運動しない。これは人間の場合でも、いつでもどこでも居眠りをする。これはB不足状態なのです。

それからビタミンC。ビタミンCは発見

されて約五十年という歴史を持っておりませんが、古くて新しいビタミンと言われています。ビタミンCの不足により、最近いろんなことがわかって来ました。そのひとつに、精神不安定、いらいらの状態になるということがあります。

こういうようなビタミンA、B、Cの三つ全部がもし不足すれば、狂暴性であっても、先程申し上げましたように、人間は理性があるから、なかなか本性を現わさないが、何かが起ると、おそらく、そういうことが起る。

そういうことを、いつでしたか、文部省の会でお話したんです。何か校長先生の会議で、文部省の人が、その会議の始まる前に、今日はあるさい校長が来ているから、気を付けて下さいと言われた。こりゃ、いやな所へ来ちゃったなあと思ったんですが。その時に、本論に入る前に、この話を

した。人間というのは、食物が悪いと、発言がガミガミしたり、激しい質問をしたりということがある。食べ物が違うと、ずいぶん性格が変わるもんですねという話をして会議の本論に入りました。その会合は非常にスムーズに運び、文部省の人に今日はいい会でしたねと御礼を言われました。

まあ、そういうふうなことで、教授会などでも非常に立派な意見も出ますし、そうでない場合もあります。まあ世の中にはいろんな人がいる訳ですよ。そういう時に、この人一体何を食べてるんだらうと興味を持ちます。昼の御弁当箱でも見たいような気になります。このように食べ物と生活というのは関係があるので。

自己診断

それじゃ、どのようにして自分でビタミンAが不足しているか、Bが不足している

か、Cが不足しているかを見分けることが出来るかについてひとつお教えしましょう。

学生にも言うんですけど、たまには、昼間映画館へ行ってみると。すると、急に明るい所から暗い所へ入ります。すると映画館の椅子がなかなか探せないんです。暗調応 (dark adaptation) と言うんですが、暗闇に慣れるのに時間がかかるんです。まあ普通の人でも直ぐには馴れません。この場合三人なら三人で行きまして、一番早く数秒で探せた人は、まあ正常で、いつまでももたもたしている人は、一番Aが不足していると言うことです。よくいますよ。人の荷物が置いてある所へ腰かけたり、もつとひどい人は、人の膝の上に腰かける。これは映画館だから、これで済むんですが。自動車運転手がもしもAが欠乏してしまいますと、相手のヘッドライトがぎりぎりの所まで来ないと発見できない。時速三〇km

のスピードで運転している場合、前方の車を目で見ても、脳の中樞神経によってブレーキを踏むまでに、発見してから一〇mは走ってしまうんです。これは雨が降っていない時で、もしも、これが雨の時ですと、一〇mでなくて一五m位進んでしまう。それが発見が遅ければ、もう衝突か、その寸前ということになる。

だから明るい所から暗闇に出る時、暗闇に順応できる能力を持たせるには、ビタミンAを十分とることが必要だと思ふ。そういう意味で昼間の映画館というのは、自分のビタミンAの不足を発見するのに役立つと思ふ。

次はビタミンBの場合です。皆さん国電の階段というのは何段あるか御存知ですか。大抵、二十二か二十三段あるんです。これを朝スーッと上れる場合は正常なんです。半分位で少しもたつき始めたならB不足です。B₁不足というのは脚気症状で足が

だるくなり、そういう状態であるんでく
る。

それからCの場合。これは、朝、歯をみがく時、歯ぐきから血が出る。それから、もっとよく経験することは、自分では、ぶつけた意識がなくても、打撲による紫の斑点ができていくということはC欠乏症に近いといっていることです。このような方法で毎日毎日を反省してゆくということは必要です。

もう一度スライドを。これがさっきお話しした自動車のものです。タクシーに乗る時は運転手の顔を見て、あまり栄養不良のような人の車には乗らない方が良いでしょう。

次のスライドは、ビタミンA不足による
鮫肌のもので、膚にポツポツがある。

次。これは脚気。もう日本では脚気はあまり見られませんが、最近又、増えて来ている。上のスライドは、むくんでいて押す

と、後にもどらないものです。これはB₁を与えると、すぐ直ってしまう。

次のスライドはB₂不足で、いわゆるカラスのおきゆうと言って唇の端におできができる。これはB₂が不足すると、ここが割れて、そこに細菌が付きますから、おできができる。

次。これは歯ぐきが崩れて来たり、斑点ができてくる。

そういう実験は、人間を使えませんから、小動物でする。

食べ物と人間の顔つき、性格は関係があると思う。食べ物というのは、ただ、身体を丈夫にするというだけでなく、顔つきも良くなるし、性格も良くなると私は思っています。

さっき、脚気の話をししましたが、大正十二年位には脚気で日本では十万人位死んでいる。ところが昭和四十八年には○になっている。ですから、若い医者には本では

読んでまずけれども、脚気を知らない。ところが最近、又、脚気が増えて来ている。

特に大学の運動部の学生に多いとのこと
です。これは、運動をしていて食事はライメンで済みます。それから、飲み物はコーラ飲料や、オレンジジュースで済みます。そうしますと、もう脚気になる要因が一杯ある訳です。運動によりカロリーの摂取を求められる。すると、カロリーをラーメンというようなデンプン質で取ると、デンプンの代謝に対してビタミンB₁が必要になる。ところがビタミンB₁は入って来ない。それで不足となる。その上、飲料で糖類を取ると、更にB₁が不足となる。それで四十八年に○になった脚気患者がまた増えて来ている。

昔は、コーラ等の飲料には人工甘味料が入っていましたので、(一時期は許可されておりました)糖類としては取られなかったので良かったですが、今はもう人工甘味

料が使えませんが、甘味が全部糖類になったのでB₁の不足が出て来ました。

隣の食べ物に気がなる日本人

そういうことで、我々の食生活を眺めてみると非常に偏見があります。その時代でいろいろな変わって食べている。ある時は紅茶キノコがやはり出すと誰でも、紅茶キノコ、紅茶キノコと言って、それが少し、下火になるとすぐ忘れてしまうが、また、隣の人が何かやるとそれに飛びついてゆく。

どうして日本人というのは、すぐ人の食べる物をまねするんだらうと思っただんです。それでそのことを考えてみたことがあつた。それは国民性の相違なので、日本人と欧米人の国民性というか、考え方の違いなんですわえ。

例えば、日本人は人皆同じ、あの人と私

は同じで、あの人のやっていることは、自分も同じだからやるといふ思想があるんじゃないのですか。ところが欧米人というのは、人それぞれ違う。だから隣の人が何をやっていても自分はやらぬといふ思想があるんじゃないかと考えます。だからそれが、食べ物についても言えるのです。隣の人が紅茶キノコをやると、じゃ私もやってみよう。

又、日本人の悪い所は、自分がいいと思ふと人に強いるんです。私の一番嫌いなのは、玄米論者というのがありますわえ。玄米論者が悪いというんじゃない、それが、いいとなると人に強いるんですわえ。親切で言うんだらうけど、非常に困るんで。人間の身体っていうのは、人それぞれ違うんだから、自分はいいと思ふといふ言ひ方をしないと、人にもいいとは限らない。結局何が効きましたといふことは言つてもいいけれども、それをやれやれと言ふ

のは止めた方がいい。

日本で人のまねをして良かったのは、学校給食だと思います。学校給食というのは、アメリカから言われてやった。最初の動機というのは、余剰物資を子どもに食べさせるという考えもあつたんで、あまり評判は良くなかったが、子どもの体格がよくなったのは事実。体格の向上は確かにありました。

反対に人に言われてすぐ取り入れる悪い面は最近の自然食品、健康食品についてです。なんでも自然食品、健康食品がいいのだというのは、一時期雑誌なんかで、非常に宣伝しました。しかし今では、だんだん反省されてきています。

健康食品とは何か？

私は、ある婦人雑誌の企画で健康食品の特集号するから原稿見てくれと言われて、

見たことあるんです。その中の健康食品って何だろうと思つて見ますと、我々の普通食べているものなんです。梅干とレモンとハチミツなんです。これが健康食品という項目別に書いてある。これは、我々が食べている食品であつて、それだけ食べれば健康になるという訳ではないから、僕は健康食品という言葉にあまり賛成できないと言つたんです。まあ結局は自然食品、食品に添加物を加えない物をすべて、自然食品と言つている。けども、今までの食品の歴史で自然食品を食べて、どれだけ中毒を起したことを考えるべきです。

例えば、ワラビです。ワラビをそのまま食べた場合、発癌物質があるということは前から言われています。それは調理されることによつてのぞかれますが、また、ピーナツなんかでも、これにつくカビのつくるアフラトキシンというのは、非常に中毒起します。それから、野草の中でも、「はし

りどころ」を食べても大丈夫ということもあります。

イギリスなんかの例だと、七面鳥の餌にピーナツを混ぜてやつて、一度に千羽位死んでしまったというのもあります。これは前述のアフラトキシンの為です。

日本人の場合、味噌、醤油に防腐剤を使わないというのが自然食品と言いますけど、防腐剤を使わなければ、カビが生えます。カビの中には、今言つたように、アフラトキシンの生成も考えられます。

確かに、添加防腐剤は加えない方がいいけど、加えない為にかえて、悪い結果が出るということもあるので、あんまり物事を極端に考えない方がいいのです。

恒常性をもつ健康な身体

今の栄養学というのは、脂質とか糖質とかタンパク質とかの基礎を講義するととも

に代謝がどうなるかを講義している訳です。ところが講義通りにはいかないんです。

というのは、身体というのは、非常に順応性があり、調節性がありますので、何かが入つて来ても、本に書いてある通りには動かない。

その最も良い例が、酸性食品、アルカリ性食品という言葉。これは酸性食品、これはアルカリ性食品だ——酸性食品を取れば、血液が酸性になると言うのが、本には良く書いてありますが……。

確かに1+2は3であり、3+2+2は1となると計算には出ますが、身体というもの、そういうもんじゃなくて、ホメオスタシスと言つて恒常性がある。この酸性食品を食べても血液がすぐ酸性になるというのではなくて健康であれば常に正常にもどそうという努力がある。だから、そういうようなことを考えるよりも、いろんな意味

で、身体を常に健康にしておくことが必要です。身体は常に元に戻そう、戻そうという努力をする。

そういう意味で、現在の栄養学というのは、順応性、恒常性の中で考えていかないと理論と実際とが一致しない。そういうことから栄養学というものは、実際に人間に実践できる栄養学が、必要になってくる。

人間の場合は、ビタミンCは生体内で合成することのできない微量の栄養素であるから確かにビタミンなのです。ところが、その他の多くの動物に対しては、ビタミンCはビタミンではない。皆それぞれの生体内で合成している。ネズミでも合成している。ビタミンCは、他の多くの動物は合成している。合成する能力がなくなったものが人間なんです。

生物が単細胞から多細胞になり、それから、脊椎動物になって、海に住むもの、地上に住むもの、空を飛ぶものいろいろでき

た。それが、ある時、突然、猿と人間、その他わずかの動物が突然変異を起して欠陥遺伝因子になった。それがビタミンC合成不能の動物になった。

もの本によると、二十五億年前に生物が発生して、四億五千万年前に脊椎動物ができて、又その後五、六千年前に、人、猿ができ、その時点から、ビタミンC合成不能の動物となった。人と猿というのは、多くの動物から見れば特別なんです。

そういうような特別な人間から考えると、ビタミンCになるんだが、ネズミなんかはビタミンCはビタミンではない。ビタミンCを合成する動物はすべてそうですが、大体、風雨とか、いわゆる環境、寒暑、雨風、外からの害敵に襲われるとか、風邪をひく、ウイルスが入り込む時は、Cを合成する動物は、これらの攻撃に対してCをどんどん作る。そして、それに抵抗しようとして努力している。

その最近の実験では、PCBという公害物質をネズミに与えると、ネズミの尿中には、ビタミンCがどんどん増えて来る。そういうことはPCBを除去しようとして、どんどんビタミンCを作る。ところが、モルモットみたいにビタミンCを作れない動物では、PCBを与えると、ビタミンCの排泄が、びしょと止まってしまい、どんどん体重が落ちてくる。いわゆるPCBの害が出てくる。

そういうように、ネズミの場合には、それを防ごうとする努力をする場合には、ビタミンCの合成を活発にしている。だけど、人間やモルモットのように、合成できない動物は、公害の為に非常に影響を受ける。そういう時に、なんらかの方法を講じる必要がある。外部から多量のビタミンCを取らなければならない。それで外部からのストレスを解消するというような動物は、ビタミンCの生合成によって防御をし

ている訳です。

そういうことも、ひとつの恒常性という
か、順応、制御する訳です。そういう訳
で、我々の身体というのは、本に書いてあ
る通りには行かないで、非常にそれを守ろ
うと努力する。このように努力する状態に
置くには、常に健康な状態に置かねばなら
ない。

国際栄養学会議から

又、元に戻りますが、身体の健康はかり
でなく、いろいろな知能といいますが、こ
れは非常に酷な言い方になりますけど。一
昨年の国際栄養学会議で栄養というのは、
母親の妊娠中に充分な栄養を与えるか否か
で、胎児の脳細胞の組織の形成の量が決
まってしまう。結局、母の栄養が悪いと胎
児の脳細胞が完全に形成しないと。
それで生まれて二か月によって、ほとん

どそれが固まってしまう。で栄養状態の悪
い母親といひ母親の子どもの脳細胞の状態
を見ると、いい方を一〇〇とすると、悪い
母親のは七〇位に出る。その後、子どもに
栄養を与えると肉体的なとり戻しはするけ
れども、脳細胞のとり戻しはできないんだ
と、非常にきつい発言があった。

結局は、頭の知能程度が、どうしても回
復しないのは、子どもの時の母親の栄養状
態に関係があるんだと。まあ日本でも「三
つ子の魂百まで」と言うことわざがありま
す。あれは小さい時の影響が大きくなって
も残ると言うことでしょう。こういうふう
なことから、少なくとも母親の栄養状態
は、子どもに影響するということです。

育ちの良さというのは、いい家庭とか、
いい食事とかいうのでなく、そこから、か
もし出される何かというものがある。その
何かというものが食べ物から来ている。ど
うもこれは食べ物に集中してしまいまし

た。もう少し心理学的な意味を津守先生に
うかがわなければいけません。食べ物の
影響に重点をおいてお話し致しました。

アメリカの諺に「Cooking can be hazar-
ous to your health.」という。「料理は、
あなたの健康を害することもできる」とい
う逆説を言っている。これは、やはり料理
をする人は、生かすも殺すも腕したいとい
うことで。まあ少しきついかもしれません
が、料理をする人は、健康ばかりでなく、
精神的面、性格的面にまで責任を持って頂
きたい。そういうことで、どうかより以上
食べ物に関心を持って頂きたい。
ありがとうございます。



第 8 回 みどり会夏季合宿研修会おしらせ

みどり会の研修会もみなさまのご熱意により毎回着実に発展してまいりました。今年も幼児教育を各角度から勉強して現場の実践をよりよく深めてゆく研修会としてゆきたいと思ひます。みなさまお誘いあわせてお集りくださいますことを心からおまちいたしております。

○テーマ 「保育のみちを深めよう」

○期 日 昭和53年 8月23日(水) 24日(木) 25日(金) の2泊3日間

○場 所 静岡県熱海市上宿町1-29「岡本ホテル」(TEL0557-81-3524(代))

●参加費 5000円 宿泊費(2泊6食) 13,000円 計18,000円

○費 用 { ●25日の1:00~4:00の音楽リズムの参加希望の方は会費1000円加算してください。
●全館貸切り予定ですので宿泊を原則といたします。

○定 員 400名

○申 込 ●受付期日 6月15日の消印から受付けます。

●下記の申込形式でおかきこみの上全額費用をそえてお申込ください。

●送金方法 送金は振替口座のみ(口座番号東京 99085)でお振込みください。

●送 金 先 東京都文京区大塚2-1-1 お茶の水女子大学文学部附属幼稚園内 みどり会研究部宛

●尚定員に達しました時はお断りすることがございます。ご希望の分科会も人数の関係で第2希望にまわっていただくことがありますのでご了承ください。

●申込後取り消しの方は、参加費はご返金できません。あらかじめご了承ください。

○内 容

① 講演(題未定)

講師 お茶の水女子大学名誉教授 周郷 博先生
元 同 大学附属幼稚園長

② 分科会

第1分科会	幼児のモラルを考える	講師	お茶の水女子大学教授 前同大学附属幼稚園長	勝部 真長先生
第2分科会	保育の理論と実践	講師	お茶の水女子大学教授	津守 真先生
第3分科会	幼児の文化を考える	講師	お茶の水女子大学助教授	本田 和子先生
第4分科会	幼児の知的生活を考える	講師	お茶の水女子大学教授	藤永 保先生
第5分科会	幼児と言葉を考える	講師	お茶の水女子大学教授	外山滋比古先生
第6分科会	幼児と自然のかかわり	講師	お茶の水女子大学教授 同 大学図書館長	太田 次郎先生

第7分科会 幼児の現場から(音楽リズムを主として) 講師 お茶の水女子大学附属幼稚園 堀合文子先生

③ 実 習(費用は別途です)音楽リズム 講師 お茶の水女子大学附属幼稚園 堀合文子先生

○日 程

	7時	9時	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時	18時	19時	20時	21時	22時
8月23日(水)					受付	開会式 オリエンテーション	シンポジウム	分科会		写真	食事	自由	自由	懇談	自由
24日(木)	起床	自由	食事	分科会	食事		分科会			自由	食事	入浴	懇親会		
25日(金)	起床	自由	食事	自由	講演	閉会式	食事	実 習 (音楽リズム)							

○参加申込書 下記の形式で1人1枚でお申込みください。

氏 名		男・女	希 望 分科会	第1希望 (分科会)	第2希望 (分科会)
勤 務 園 名		勤務園 住 所	TEL ()		
夏 季 連 絡 所			TEL ()	宿 泊	宿泊する 宿泊しない ○をつけてください。
実 習 申 込	音楽リズム実習をうける。 うけない ○をつけて下さい				

私の保育

——子どもたちとともに歩むこと——



松田英子

私は昨年四月から勤めたばかりの新米教師です。なぜ私がこのようにおきなごたちとかかわるようになったのか少し触れてみたいと思います。私は小さい頃からずっと教師という職業にはあこがれの気持ちを抱いていました（たいていの子どもたちが一時期あこがれるように……）が、高校の時から、はつきりと小学校教師になりたいと思うようになりました。そこで、幼稚園教師になりたかったのではありませんが、いずれは小学校の教師になりたいと考えて、幼児期の子どもの実態を踏まえたうえでやろうと地元の四年制大学教育学部に新設されたばかりの幼稚園教員養成課程に入学することを望みました。

しかし、入ってみて、専門科目の講師の少ないことや、カリキュラムが重なりすぎて関心ある講義を受けられなかったり、適当な場所が用意されていなかったりで、私たちを受け入れると公表しておきながらこんな不十分な体制であった大卒側への不満でいっぱいになったものでした。この新課程では幼稚園教諭一級・小学校二級の普通免許が取得できるものでした。当時、就職難を予想されていたので、免許はとれるものなら頑張って小学校一級・養護教諭一級もと欲ばっていました。でも私にとって欲ばったことが、自分自身のそれま

での「教育」に対する考え方を根から掘り起こされるような体験をもつことができたのです。こうして今、障害をもって
いる子らとの日々があるのです。

「子どもを理解すること——本当に難しいことです。表面上は、子どもについて書かれてある本をいっぱい読んだりすれば十分にわかりそうですが、何しろ相手は動く人間です。また、こちらにも感情をもったおとなの人間ですから益々大変なことです。ましてや子どもにほとんど言葉がなく、表情も固いとしたりどうでしょうか。私たちはお互いを理解しようとする時、どうするでしょう。表情から喜びや悲しみを読みとったり、動いているところから相手の興味・関心事をさぐったりしますが、ほとんどはコトバによるコミュニケーションに頼っています。

私が日々の保育にあたっていて、コトバを話さない子たちを理解しようと全身で語りかけをすることを常に心がけています。コトバでなく体での対話です。余談ですが、前に大変おもしろい映画を観ました。「ブロー・ミー」という題名でしたが、ある夫婦がいて、夫は妻が浮気をしたらしいと思
い込み、探偵を雇います。妻はただ自由になりたくて外に出
ていたのですが、探偵はとにかく追跡しました……何も言

わず、彼女のやることを真似して同じことをやってみるので
す。そうして探偵と妻は一言もコトバを交さずして友だち
になりました。探偵は彼女の夫に、何も言わず彼女の後につ
いて、彼女のすることを真似していれば彼女を理解でき
るというのです。その夫婦はもちろん……。

コトバなんて厄介なものです。とんだ誤解をしてみたり、
つけ足してもつけ足しても十分に気持ちを表現できないとき
があります。しかし、やはりコトバがあるならお互いを理解
するのに早いです。

私の勤める幼稚園は、障害幼児のための母子通園施設であ
るグリーンローズ・オリブ園と「ことはの教室」が同じ敷地
内にあります。また、乳幼児の保育園も隣設されています。
幼稚園の各クラスには一―三名の障害児が導入されています
し、保育園にも週回かの割で四―五名の障害児が入ってい
ます。

また施設側では一五―二〇名のグループ三クラス、難聴児
五名一クラスの四グループが集団指導をうけています。朝の
自由遊び時間に一時間程参加するグループも一つあります。
これらのグループは、グループ同志の合同保育はもちろんで

すが、幼稚園のクラスと合同保育したり、色々な楽しい行事（遠足・運動会・お店やさんごっこ・雪あそびなどなど）に参加できます。このようにしていつでも障害児と普通児との交流の場をもつことができるというのが最大の特徴といえます。

幼稚園クラスにいる障害児は他児とのまじわりの中で、刺激され確実に伸びています。けんかや普通児のいたわりの中で……。

私は、幼稚園教員ですが、障害児担当として、幼稚園クラスの導入期以前の障害児一四人の集団指導にあたっています。ここには私も含めて三人の保育者がいます。他の二人の保育者には S T (speech therapist 言語治療士) の資格があり、それぞれの持ち味を生かし合っていますし、一名は男性であり、特に男児とのかかわりにとっても有効的です。

次にグループの一日の流れを少しみていただきたいと思います。

(下表参照)

10:00	登園 幼稚園児との自由あそび
	排泄, うがい
10:30	マラソン, 散歩
	(おはじまり) ●体操 ●あいさつ ●手あそび その日の課題的なもの 製作, 戸外遊び コーナー遊び etc
11:10	排泄, 食事準備
	食 事
11:50	出席スタンプ, うがい
12:00	絵本やペープサートのおはなし
12:10	(おかえり) ●あいさつ

子どもたちが来園する主訴は、「ほとんどことばが言えない」とか「呼んでも返事をしない」「ひとのいうことがわからない」というコトバに関するもので、そこで障害に気付いているようです。コトバだけ遅れているのではなく、発達検査をしてみると運動面にも落ちこみがみられますし、社会面にも対人関係の欠如があることが多くあります。ですから、コトバを持たない子には、コトバだけの訓練では治療にならないのです。全面発達をめざす治療教育——保育でなくてはならないのです。

脳性マヒのように明らかな機能障害の場合とは別として、どうも歩くのにも走るのにも何かバランスの悪さがあるようです。多動でかなり走り回っている子でも一本の線の上を上手

に歩けないことや、ヨイドンで目的地まで駆けることは苦手であることが多いのです。そこで毎朝のロープにつかまっ
てのマラソンを日課として考え出したわけです。

また、目と手足の協応動作も苦手のようです。音楽はみんな好きなので、カセットテープにレコードをふきこんで、よくTVでやるような体操を使って、音に合わせて身体をゆすったり、まわったり、はねたりの簡単な動作模倣をひき出します。はじめは全く関心がないかのように他の遊びをしている子どもも、次第にちらっと見るようになり、仲間に入りはじめます。それとお母さんとの手遊びなども通じて協応動作を促進します。

障害児、殊に対人関係の稀薄な子の場合、よく母親の子どもへの養育態度が良くなかったからなどと言われますが、障害をもっていて、コトバの出ない子どものため、子どもの要求や気持ちをはわからなく困惑してしまつた母親が、その後あまり育児が上手でなくなるという例が多いようです。そのため子どもは母親の存在意識がないことがあります。また自身自身の存在意識もなく、返事をしないことにもつながります。

そこで、母子関係の安定化をはかり、子ども自身のボデ

ィ・イメージを確立させるため、お母さんと一緒の手あそびや遊戯をしています。愛情をもって肌に触れてあげたり、呼びかけしたり、くすぐりによる笑いを誘つたりすることによつて次第に母親との関係が良好になります。遊びの上手なお母さんになつたらしめたものです。

食事の時間。待ちきれずに歩き回り他児のお弁当に手を出す子、泣きわめく子とさまざまですが、初めの段階はまずみんな同じ場所で楽しい雰囲気でお食することに重点をおいて残してもかまわないことからはじめます。このような毎日のくり返しから待つことができるようになります。偏食などもあり改善されてきていますし、他児の刺激をうけてか、自分でスプーンや箸をもって食べるようになりました。

幼稚園児との合同保育は、はじめは食事の時間だけ、それから食事後の絵本・紙芝居——自由あそびとだんだん時間を長くしていきます。クラスの子どもたちと慣れてきて、十分な交流がみられるようになったところでやっと、一緒に課題的な遊びをするようにしています。

このようにして幼稚園児との交流をもつとき、ことばの教室、オリブ園の職員たちが集まって合同クラスや日時を決めています。どちらとも自分たちの専門性を生かしていること

しています。今年度は試験段階ですが、来年度からはさらに充実したものとなるよう、今年度の反省をもとに練りなおさなくてはなりません。

障害児を担当してみても、普通児の発達や人間の気持などがあらためてわかったような気がします。この子どもたちとの気取りのないつき合いによって真の対人関係が生まれ、ともに歩むことができるものだと思います。

かなり遠いところから通園している子どももいます。そのため親の精神的・経済的な負担は大きいものです。経費は福祉関係と相談して減額の方向へともっていったりできるので、長時間交通機関を利用して来る子どもたちは、園に着くと疲れてしまいます。こういうような状態なので、できるだけ地元幼稚園や保育園に通園させたいと考え、フォローしてゆけたら良いと思っています。しかし、母親がつきつきりで通わせるのも大変です。かといって保育側の方で障害児を担当保母がいるわけはありませんから、容易には障害児を受け入れてはもらえません。

保育者もまた、このような子どもたちと接したことがあまりないということで、なかなか受け入れ難いようです。障害

児について勉強する多くの機会が与えられています。そのような場にどんどん参加していくべきだと考えます。現在、現場で働いている保育者の再教育の場が是非とも多く必要とされます。秋田県においては、秋田大学教育学部に臨時養護教諭養成課程として一年間研究できるところがありますし研究会もあちこちで開かれているようです。

しかしながら、ことばの教室、オリブ園の卒園児を快く引き受けて下さっている幼稚園、保育園もあります。就園後の様子をたずねたり、週二回の割合で個人指導にあたり、フォローアップしています。

私は大学時代に、自閉的な傾向をもつ幼児と出合い、幼稚園に通園している間半年程観察していました。その子は今、小学校に入学して情緒障害児学級に通級しておりますが、その子どもを通して、「子どもを知る」ことの難しさを知らされました。

その子の多動なことといったらすごいものでした。後を追いかける私の方がくたくたになったものでした。その動きの多いことは、その子どもの興味、関心のあることを意味していたのであり、TVのCMを時々言うのには、それなりに関連があり、その子なりに物事を捉えていたのです。

そうではなくて、こうなんだよと何度教え、(教え込むとい
った方が正しいかもしれないが)てやろうかと気はあせるば
かりでした。しかし、私とその子は十分な人間関係もできて
いなかっただため、何一つ聞き入れてもらえませんでした。当
然のことだったのです。やはり基本になるのは、お互いが生
のままできあい、理解しようと努めること——こうやって
生まれてくる人間関係ではないかと考えます。

私は今、障害児の集団指導を担当していますが、前に例に
あげた子どもとは違った障害の子どもも担当しています。対
人関係や知的な能力はかなりよいのですが、身体が不自由で
動くのが困難な子ども(例えばC・Pのような)を扱ってみ
て、絶対させてはならない部位とか、必ず段階を踏まえてや
らなければならぬという特別な原則があります。本当に障
害に早く気付いて、早く処置をとらなければなりません。殊
にC・Pの場合であれば、筋肉がどんどん固くなってしま
うので、早期治療ということは言うまでもないことです。私
たちのところには、このような子どもたちの指導に詳しいも
のはあまり多くないので、他の機関の専門の先生に相談し
たりしながら横の関連をとってやっております。私自身もこ
のことはとても勉強になっています。

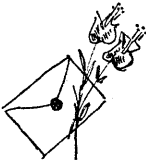
一つのグループに色々な障害をもつ子どもがいると、指導
方針がたてにくいとかいう理由で、案外に同じ障害をもつ子
ども同志を集めてしまいがちですが、それには少し納得がい
きません。確かに指導をする時に内容を決めるのは大変です
が、子どもは他児とのかかわりの中で変化していきます。一
例をあげれば歩行できない子がまわりの走っている子どもを見
て、『歩きたい』という意欲をおこし歩行訓練を喜ぶようにな
ったりしていることです。歩行できない子にいたわりの気
持ちで手をひいてあげたりする子どももできています。子
どもたちがともどもに育ち合うという感じです。私たち保育
者はまさに子どもから学習しているのです。子どもたちの感
じるところを感じとり、子どもたちの行動を理解できるよう
な、その子どもたちひとりひとりのもっている限り可能な
性をひき出してやれるようになりたいものです。

「思いつくままに綴ってしまったのですが、論点が定まら
ず断片的に色々なことを書いてしまいました。拙ない文章を
読んで下さった方に感謝いたします」(ルーテル愛児幼稚園)



私の幼児教育論（その一）

下山田裕彦



はじめに

教育はこれだよいのだろうか、という思いに私はとらわれるのである。

(一)

われわれがたずさわっている幼児の教育は、この世の動きと無関係であつてよいのだろうか。われわれが生涯をかけてやらんとしている保育という営みはこの世の中にあつてどのような意味を持つてるのであるうか。この世の中にみられる矛盾や不合理を解決する為のなんらかの手立てを保育の営みの中で、われわれは追求する必要があるのではなからうか。確かに、子どもたちの中において、共に遊んでいる時、われわれは時にこの世の激しい移り変りを忘れがちである。このことを十分に承知しつつも、幼児の

私は倉橋惣三（一八八二—一九五五年）に限らない親しみを持つている。特に、内村鑑三（一八五九—一九三一年）の第一期講談会（明治三十三年七月二十五日—八月三日、於角筈の女子独立学校）に小山内薫らと共に出席した若き日の倉橋（十八歳）の写真をみると、幼児教育の最高峰にいた倉橋惣三は、信仰上の私の先輩でもあったのだ、という驚きにも似た感動に包まれ

る。「(第一回夏期講談会)」の記念写真は「聖書之研究」(復刻版月報1に所収)

最前列右側から二番目に場所をしめている十八歳の倉橋はひきしまった顔立ちで、前方右側をじっと視つめている。

倉橋が内村から学んだ聖書の思想は「その考え方の根底において、その態度において、聖書の人生観が底流をなしていることを随所に見ることが出来る」(「幼稚園の歴史」二八一頁)との津守真氏の指摘のごとく、確かに無視出来ないであろう。問題は倉橋の把握した聖書の思想があくまでも、「神の愛・新しき心」・「嬰兒の心」に重きを置いている、ということである。(以上は、『聖書之研究』誌上に発表された若き日の倉橋の信仰告白とみてよいだろう。詳細は『聖書之研究』一二号(明治三十四年八月)から一六号(明治四十三年一月十五日)までの倉橋の文章を参照)言うまでもないことであるが、神の愛・新しき心・嬰兒の心は神の審判・怒り・義の実現と共に用いられる言葉である。若き日の倉橋の文章に神の審判・怒りという重要な聖書の思想を見出すことは困難である。このことは彼の保育思想から社会的性格を欠落させることになった、ということの意味するのである。何故なら、神の審判や神の義の貫徹という思想を欠くとき、自己の救いや自己の充実が最優先され、人間と社会の罪が徹底的に糾弾さ

れないままに、結局は自己を直接的に肯定することになるからである。

倉橋が約十年に及ぶ内村の忠実な門下生であったのにもかかわらず、内村の下を離れた理由を、現在のわれわれは知るべきがない。が、ここで注目すべきことは、倉橋が後年、日本の幼児教育界に展開した「自由保育」の根底にある「自己充実」は内村から学んだ聖書の思想に源をもつ概念である、ということである。だから、これを「神にある」自己充実と言いきることが出来る。しかしながら、倉橋の社会的地位の向上と共に、自己充実の前提条件である「神にある」は形骸化した。そして、そのことの故に、不幸にも彼は太平洋戦争の渦にまきこまれていった。これは倉橋一人の挫折であるばかりか、日本の保育界の挫折でもあるだろう。つまり、日本の保育界の最高の指導者倉橋は同時にその代表者として責任を厳しく問われる立場にいたからである。

(二)

太平洋戦争は日本国民の全てをまきこんだ総力戦であった。だから、今更、過去の出来事を引きあいを出して云々することは建設的ではないと言う声もある。しかしながら、例えば次のごとき

弁護論を読むとき、過ぎ去ったことは忘れよという悪魔の声としてしか私には聞こえてこない。

『彼の文章に、時局に應ずる変化がはっきり見えたしたのは、

昭和十五年ごろからであった。……その当時の彼を一方的に、変節者であるとか、日和見主義的であると判断するのは、あまりにも酷であるといわねばなるまい。もともと、彼は性格的に、大胆不敵ではなく、争いを好まなかったが、何よりも先ず、彼が念頭に置いたことは、こうした時代において子どもたちを守るために、最低限度でも、くふうや努力をすることであろう』（坂元彦太郎著『倉橋惣三・その人と思想』フレーベル館 一四〇—四一頁）

坂元氏の右の言葉は私の倉橋への率直な疑問や評価をも念頭に入れているのであろうか。誤解を避ける為にここでもう一度書いておこう。私は倉橋を「変節者」・「日和見主義的」と一方的に断定したことは一度もない。倉橋が内村の門下生であったということとの故に、私は限らない親近感を抱いている。だからこそ、私は倉橋のつまづきの内実を切に知りたいと思う。同時に、私は、若き倉橋が内村の下にあって体験した「自己充実」の何であったかをも推量したいと思う。それはおそらく一高、東大在学中の倉橋が彼の生命の全てを燃やしつくしても燃やしつくすことの出来な

かった感激の日々であったらうと、思いめぐらすのである。

『聖書之研究』（第三十三号・明治三十六年二月十日発刊）から引用しよう。

感謝の日記 倉橋惣三

一月廿三日、渡良瀬河沿岸の同胞を見舞ひて、読者諸氏より贈与品分配に立会ふべき任を負ひ、浅野君と共に午後新宿より出発す、発するに臨み内村先生戒め給ひけるは、分配につきては極めて不公平のあらざる様専ら心を用ぬざるべからずと、吾等は如何にして此の任を果たし得べきかを知らず、誠に身上にあまる任務なれば楽しみと心配と交々胸に通ふのみ、……

二十四日、愈々今日となれり。田中正造翁吾等を待ちて昨夜既に当家にあり給ふも、感冒の気味にて床より離れ難く、吾等は翁が分配場に從ひ得ざることを遺憾とせり。……

二十五日 安息日なり、忙しき安息日なり、吾等は今日安息日を迎へたるを感謝し、又安息日にかくの如く忙しきことを感謝せざるを得ず。……

この時、倉橋は十八歳、一高在学中であった。信仰の熱心に動かされて、田中正造にまで面会に出かけていった倉橋の面目躍如

たるものがある。

若き日の倉橋は「神にある」自己充実の中に日々を送ったことは確かである。これは晩年に至るまで倉橋の心を占領していた消しがたい思い出であったに違いない。何故なら彼が晩年の傑作『子供讃歌』の中で内村を「精神の師」としてなつかしく追憶しているからである。

(三)

内村との出会いによって、聖書の思想に触発された倉橋が日本の保育界にはたした貢献は絶大であった。特に、子どもを「人格的存在」として捉え、子どものもつ絶対的尊さに根拠をもつ保育論を展開したことは倉橋ならではの出来なかつたことであろう。

例えば次のごとき『一人の尊厳』を読むとき、私は無条件に感動する。

一人の尊厳

人間は一人として迎えられ、一人として遇せらるべき、当然の尊厳をもっている。ただに人間ばかりでなく、宇宙の一物といえども、もの皆個体の存在をもっているのであるが、人間におい

て、特にその尊厳をもつ。(中略)

今我等は、新しき子供を迎えた。一団の新入園児を迎えたのもなく、一組の新入学生を迎えたのでもない。我等の迎えたものは、その一人ひとりである。一人ひとり、人間としての一人の尊厳をもつて、我等らの前にあるのである。……(倉橋惣三選集第二卷三五頁)

これが発表されたのは大正十二年(一九二三年)、『幼児の教育』第二十二卷四号)のことであるから、倉橋四十一歳の時になる。

大正八年から十一年まで文部省在外研究員として欧米各国で研鑽を積んで帰国したばかりの倉橋が、柔らかなハートで、子どものもつ尊さをうったえるその情熱に、私は倉橋の心臓の鼓動を聞く思いである。倉橋のもつこのような心情の細やかさは聖書の世界の深刻無比な愛の広やかさと深さとに根拠をもつてであろう。

繊細な心で、傷ついた弱者を暖かく包みこむことの出来た倉橋が、何故、この世の矛盾、つまり、強者が弱者を踏みこむ悪の問題に鋭敏に気付かなかつたのだろうか。私が倉橋の保育思想に共感を覚え、その保育理論を今日の保育実践に継承せしめるその

筋道を模索する中で、とまどい、疑問に思うことは倉橋の保育思想における「社会的性格」の欠落という問題なのである。

それでは何故、倉橋の保育思想から「社会的性格」が欠落するに至ったのだろうか。それは、前述したように内村によって学んだ聖書の思想を倉橋が誤解して受けとっていたからなのである。

倉橋惣三の書物を読むことから始まった私の保育の研究は、ただ十年しかたっていない。それにもかかわらず、私は倉橋の保育思想における限界を指摘してきた。生前の倉橋と親しく接してきた今日の保育界の長老たちからみると、私のなしてきたことは僭越以外のなものでもなかったであろう。このことを十分承知しながらも、あえて、日本の幼児教育界の最高峰・倉橋の業績と足跡の限界を指摘してきたことにはそれだけの理由がある。

第一に、保育問題研究会のメンバーから、私は断片的な倉橋批判を聞かされてきた。

第二に、倉橋の息吹きに触れた人々から、倉橋批判を期待できない。

第三に、お茶の水女子大学やその附属幼稚園、あるいは本誌『幼児の教育』は倉橋と密接に関わってきただけに、倉橋に対する尊敬の余り、倉橋をつき離し対象化することの出来ない場に今

日もなお立たされている。

第四に、キリスト信徒・倉橋を彼の内側から理解する為には、聖書の思想に共鳴し、聖書の思想を生にかけてつらぬき通そうと、誓った人であることが望ましい。

右に列挙した第四の理由に私がふさわしいかどうかは、第三者の冷静な判断を待つ以外にはないだろう。

(四)

「私の幼児教育論」と題する論稿の中で、私は倉橋批判をしているに過ぎない、という印象を受けた読者もいるだろう。

私の幼児教育の研究は倉橋の業績を見直すことから始まったのであるから、私の作業は彼の限界を指摘するということをも含むのは当然であつたらう。

しかしながら、私の作業は過去に向けられているのではない。今日の保育界の動向を視野に包みつつ、日本の保育界の望ましいあり方を追求しているつもりである。このことが虚偽にならないように私が意図していることの一つを率直に述べることにしてう。

第三十回の日本保育学会（於、聖和女子大学）で私は倉橋惣三の保育理論研究——殊に「継承」の問題をめぐって——と題する口頭発表をした。その中で、私は山下俊郎氏のこと言及した。その部分を引用することにする。

「……日本保育学会の会長は倉橋から山下俊郎氏へと受け継がれていきました。ここで、倉橋の保育理論は山下会長へと継承されたかどうか、という仮説をたててみたいと思います。何故、これを問題にするかと言えば、宍戸健夫氏（愛知県立女子大学教授）が『現代の保育理論と幼児観』（『日本幼児』所収・明治図書）という論文を展開する中で、山下氏の思想について触れているからであります。

宍戸氏は山下氏の「幼児の家庭教育」一九四四年度版、つまり戦前版と一九五一年度版、つまり戦後版の両者の内容を詳細に比較検討しながら、山下氏の思想について批判しております。この論文が私を読んだのは一九六八年のことです。それから、今から約十年前、私が保育の勉強を始めた年であります。その為でしょうか、私はその時の驚き、動揺を今なお、昨日のごとく鮮明に覚えております。

宍戸氏は山下氏の「社会的適応」や「協力」という言葉にもられている内実を明らかにして、「山下俊郎氏自身きわめて社会に

適応している人間だということになるであろう（二〇六頁）と結論つけております。……」

このような批判を宍戸氏が公の場でなされたのであるから、山下氏もフェアに公の場で、この批判に應えるべきであろう。

右に引用した私の言葉も、言うまでもなく保育学界の最高責任者、山下氏への率直な批判である。

現存し、活躍している方への批判には愛と慎しみがなくてはならぬことを私は十分心得ているつもりである。が、今日のように学会がふくれ上り、時代の新しい難問に対処していかなければならぬ時、時代感覚の鋭い次の世代の人間に、学会の会長の座をゆるむ必要のあることを言外に含んだ批判であった。

つまり、研究者は生涯をつらぬいて生きる思想に忠実でなければならぬ、ということを私は言いたいのである。いつも権力の中核に近づいてきて、「自分」を持たぬ同僚を私は自分の近くにみてきているからである。

倉橋は確かに挫折した。その挫折の内実を検討することなしに、私は、「私の幼児教育論」の基礎を固められないでいる。何故なら、若き日の倉橋が内村と出会ったと同様、内村の高弟、矢内原忠雄を通して私は聖書の思想に触れたからである。（静岡大学）

子どもと共なる日々

高橋洋代

木曜日、午前六時起床、子どもたち（長男六歳、次男三歳）はまだ眠っている。そうっと着換えをすまずと階下へ降り、ストーブに火をつける。さて、七時三十分までにすべてを終えなければ、ごはん炊き、おべんとう作り、夫と子どもたちの朝食を用意し、自分の朝食をすませ、留守中のメモを記す。そろそろ時計は七時をまわっている。子どもたちを起

こしにいく、昨夜、会議でおそくなった私の帰りを待って寝たのでまだ目を覚まさない。時間はせまる。つい「おめざがあるわよ」「さあ着換えを手伝ってあげるから……」「どっちが早起きかな？」などのセリフがとび出す。子どもたちがやっと起き上ったのが七時十五分。家を出るまでにあと十五分しかない。おどしが始まる、「早くしないとママ行っちゃうわよ」「ホラ、男の子でしようメソメソしないの」「ママ、電車に乗り遅れちゃうじゃないの」等々、長男の幼稚園登園のための用具を持ち、二人の朝食をそえて、となりの祖母のところへ子どもたちを連れていく。「じゃあ、ママ行ってき

ますね。オバアチャンのいうことをよくきくのよ」と言う。と、おきまりの儀式「チュッチュ」「握手」「おならチュッチュ（ホッペにプーッと息をふきかける）」をして、こちらもやっと晴々として家を出るわけである。

現在の私にとって、子どもと共なる日々は、ある面では戦いであるように思う。

結婚する以前から私は、子どものことばの問題の相談とか、幼稚園教諭の養成とか、保育にかかわる仕事を続けてきた。仕事で出会う子どもたちを、私は今だに一度もにくらしいとか、いやな子だとは思ったことはない。どの子も皆かわいく、それぞれ個性をもっていて、無限にやさしくすべき存在のように思っていた。そして今もそう思っている。しかし我が子というものは、どうしてこうも腹のたつものなのだろうか、長男がまだ、ほんの二、三か月の頃から、私は心の底から腹立たしい思いをもったことを憶えている。我が子というものは、四、六時中共に居て、私の眠くてたまらない時も

たつき起こすし、じつと本を読んでいくともじやまをするし、一日相手をしてやれば夜には私の方が疲れはてて、ともにダウン、という具合に、とつても困る存在なのだ。

私は生来、わがままで気が短く、待つことが不得手であり、睡眠、食事はともにタップリとらないとすぐイライラしてくる方である。わがままが顔を出さない「仕事上の時間」とちがいで、毎日の生活は「地の私」が行なっていることなのでイロイロと問題が生じるわけなのである。いつか長男が一歳の頃だったろうか、子育てとは知識・方法を問題とする以前に、「自分の生きざまを問われることである」とつくづく思ったことがある。

人間は肉体をもっているが故に、肉の願いと精神の願いがぶつかる。肉の願いははてしなく、快楽、安逸、美食などへと向かう。寒い朝は暖かい寝床にいつまでもまどろんでいたし、好きなもの、おいしいものはお腹いっぱい食べたいし、いやなこと、めんどろなことはしたくない。好きなことだけしていたい……。言い出せばきりがなが、このような欲望のままに生きられたらどんなに幸せだろうと思うこともある。しかしこの自由そのもののように思われることが曲者なのだ。「自由とは選択する能力である」という定義に従え

ば、このような状態は、自己の欲望の奴隷であり、「いっそう高い価値の善を選ぶ」自由は放棄していることになる。精神的にも満足は得られないであろうし、結局は肉体をも滅ぼすことになろう。

しかしながら、基本的には、このような欲望をもった、人間たちが一つの社会を作っているわけだし、夫も私も、また子どもたちも、その同じ人間なのだ。そこで、社会を形造っていく上での人間たちの教育 education の必要性が生まれるわけであろう。

education とは、P・フルキエによれば、「……から外に出させる」という意味であり、次のような三つの解釈が成り立つという。

- 一、動物的な状態からよりよい状態に導くこと
- 二、子どものうちに隠され、埋もれていた富を外に出させること
- 三、自分から外に出させ他の人に注意するようになること

これらの定義から考えれば、子どもを育て教育していく為には、私自身「よりよい状態」とは何かをしっかりとらえていなければならないことになる。私の考える「よりよい状

態」とは何だろうか。私自身はどのような理想に向って生きていこうとしているのだろうか。そしてその理想を子どもの中に育てる為にはどのような育て方をしようとしているのだろうか。

たとえば、真、善、美、を愛する人になりたいという理想を抱いていたとする。真なることを愛する為にはまず謙虚で誠実でなければならぬし、まず自己を知らねばならない。嘘つきであってはならない。

善きこととは、人へのやさしさ、共感する心、勇氣、強い意志、一貫したその人らしさ、向上心など、数限りなくあげることができる。

美しきことを愛するには、まず、美しさに共感する心がなければならぬ。そして美への愛は高次の美を求めていくにちがいない。

それらの真、善、美を愛そうとする熱い願いと実際に愛する意志と行動力を私自身の中に育てることによって、はじめて「導く」ための、「子どものうちに隠され、埋もれていた富を外に出させる」ための、基礎的な部分が用意されたことになろうし、「自分から外に出させ、他の人に注意するよう」に「導くこと、即ち、「他人についての感覚を教えること」

もできるようになるのだと思う。その後初めて、子どもの中にそれらを現実に育てる為の「方法」が考えられ得るのではないだろうか。「子どもの気持を尊重する」という児童学的立場はこの時初めて生かされてくるのではないかと思う。

ある夕方のことである。私は夕食の仕度をしていた。子どもたちは何やら夢中で遊んでいる様子である。そのうち、夕焼け小焼けのメロディーにあわせて大きなダンボール箱に何かを乱暴に入れはじめた。私は「あー多分ゴミやさんだな、ノッテルな」と思いながら夕食の仕度を続けていた。ところが二十分程して、近くに来たそのゴミやさんのダンボールの中をのぞいて驚いた。折紙、新聞、クレヨン、レゴ、おはじき、つみ木、自動車、ねん土、とにかく、ありとあらゆるものがゴチャゴチャにつめこまれうず高く盛り上っている。何ということだ。私はどなった。「もう夕食はできたというのに、これを全部、分類してかたづけなさい！」

常々、めんどうくさがりやで、お片づけは大部分母親の仕事ときめこんでいる子どもたちにとっては、ここがしつけのしどころ、という理性の声もかすかにしたが、それよりもメチャクチャに詰め込まれた「物たち」を見て、むしろように腹が立った為である。かくして私は、「早くしなさい！」「ママ

は手伝いませぬ」と何度かとなり、子どもたちは片づけるプロセスもまた遊びにしたようだったが、ともかく一時間程かかって、元どおり片づけた。

冷静になって考える。「ちょっとかわいそうだったな、あんなに怒鳴らなくてもよかったかも」ゴミやさんになりきって楽しんでる子どもの想像性、創造性、そして、自発性、これらは尊重しなければならぬ。しかし自分たちが遊んだ後のおもちゃを片づけることも社会の一員となる上に必要な義務である。そしてその義務もまた愛する人間にしないでならない。母親に怒鳴られるのがこわくてゴミや遊びはもう二度としない、というならまだですが、我を忘れて遊びの中に没頭することをやめてしまったらこまる。自発性は子どもが発達・教育の源動力だ。また、遊んだら片づけるという義務は、美しい環境を愛することであり、共に楽しい時をすごした「物」への愛を育てることもある。怒鳴られ、怒られながら片づけることによってそういう義務は苦痛なものだという印象しか残らなかったとしたら、そしてそういう毎日積み重ねていったら私は子どもたちの中に何を育てていることになるのだろうか。

片づけを少し手伝ってやってから、「二人でこんなにきれいに片づけてえらかったね」とほめたものの、「これでいいか」という疑問が頭から去らない。子どもたちはサッパリした顔をしているのだけれど……。

入学前の知能テストを「血のテスト」だと思いこみ、「この血をとるの？」とこわごわたずねた長男、かやぶき屋根を見つけて、「あ、お庭のおやねだ」と歓声をあげた次男。彼らとの共なる日々は、毎日楽しく過ぎていくが、さて、日々の生活を通して、彼らの中に何を育てているのかということになると、まるで雲をつかむようで、心もとない限りである。

個人のうちに人間の理想をうえつけ、理想への熱い願いを育てることは、どのようにしたら可能なか。子どもと共なる日々の中で時々頭をもたげてくるこの間は、わがままで気が短く怒りっぽい私にとっては依然として非常にむずかしい間である。

※P・フルキエ著 久重忠夫訳『公民の倫理』筑摩書房一九

七七年

神さま？ と空と

神 沢 利 子

わたしが子どもだった頃、世の中には不思議が満ち満ちていたけれど、空は何といっても不思議の最たるものであった。

青空から曇り空のなまり色に変わり、また夕焼けの真紅に燃える空は、夜には宝石のような星をちりばめ、ある時は呆れるほど沢山の雨をふらせ、雪をふらせるのだったから。

太陽というわたしたちの手に触れることのできない、そのくせ、それなくては生きられない存在があつて、空と神とはわたしたち人間の中に深く結びついたのかもしれないが、幼い子どもにとつておとなからきく神さまはひどく奇妙なものであつた。

そして、わたしは紛れもなく日本人の子どもであつたために、神さまというものが絶対唯一のものとしてではなく、多種多様に捕えられた。まずは雨をふらせ雪をふらせるのはだれかという間に、母は神さまですよと、一番やさしい答えで答へ、兄は雪はともかく、雨をふらせるのは雷にきまつてる

というのだった。たしかに太鼓をかつき、黒雲にのつて空を駆けまわる雷さまは絵本でもおなじみであつたが、神さまの姿は描けなかつた。

「どんなことをしても神さまはちゃんと空から見えていらっしやいます」といわれる時、神さまはまるで透明人間のスパイのようであつた。神さまはそのようにのつべら棒の顔をしていた。困ったことに家の神棚の上にも神さまはいるらしく、また、赤い鳥居のお社にもいるらしかつた。教会を知つたのはいづいぶん大きくなってからだけれど、イエスという神さまの子どもの話は、十二月になるとクリスマスと一緒に行ふ絵本や雑誌で語られたから、西洋人の神さまがいることだつて知つていた。

そして、それらの神さまは地にいるかと思つと、みな空にいるようでもあつた。

その他にも神さまはいた。タカマガハラというところは天にあり、そこに天皇のご先祖だつたという神さまがいられた。その上、死んだひとがいくつという天国も空にあるらしかつたから、空はどんなに広くともさまさまな神さまと死人が雑居していて、わたしはただ混乱するだけであつた。

そうして澄み切つた空をいくら仰いで、雷さまも翼のは

えた天使も、イザナミたちが立った天の浮橋も何ひとつ見えはしなかった。時々、まぼろしの神の衣のような白い薄雲がとんでいくだけであった。

わたしはりんごの木にのぼったり、木の下にねころんだりしては、あかずに空を眺めた。空はあんなに大雨をふらせるのだから、きつと大きな湖があるのだ。だから、あんなに青いのだろうと思ったりした。

ところで、空はただ、自分のあたまの上にあるものと信じていたのに、そうではない。わたしの住む大地も海も地球という球の一部で、それがこの大空をくるりくるり回転しながら浮かんでいるという。

兄の語る地動説こそ、わたしをまたもや不安と混乱に陥し入れるものであった。

それならばなぜわたしたちは回る地球から滑り落ちないのだろう。わたしたちは大地に立っているはずなのに、反対に大地にぶら下がっているのかもしれない。そうして、そんなことが今までなかったにも関わらず、いつ、大地震のように山や町が崩れ、滑り落ちるかという不安がわたしの心を落着かなくさせた。そうして、地球が空に浮かんでいるものである以上、わたしたちが墜落していくのは空のただなかの

筈であった。

空を仰ぎ、夜空の星を仰ぐ時のあのいわれない恐怖はおとなになってもこのこっぴいて、空に墜落するのではないかと、目まいに似た感情は今もしばしばわたしを襲う。

はじめて飛行機にのったのは、ここ五、六年程前のことで、踵が地から離れることに原始的な恐怖があった。しかし、何ということはなく雲海をどぶ時、十何年前にかいた童話の、天の雪原を疾走するトナカイの橋と、黒衣の老婆のそのイメージが寸分違わぬ風景でくりひろげられた。天の雪原よ雲海であり、またはるかオホーツクの流水の海に似ていた。

わたしの人生という現実は大地に否応なく縛られている。肉身から煩わしい世の慣いのすべてから、がんじがらめに縛られ、飛翔を許さず空を仰ぐ囚人のようだ……。

樹木の根が地の下の暗く陰湿な土中から、さまざまの生物の腐肉や腐葉土からその精を吸いあげ樹液は矢のように梢めざしてのぼっていく、大地に縛られ、大地を緊めつけながら天を仰ぎ、天をひたすら指す樹木のところがわたしにはいい。空とは、天とはむかしも今もわたしにとって何なのであらう。

(児童文学者)

四日市の空

田口 鉄久

私の勤める園の裏手には、たびたび園外保育に出る見晴しの良い山がある。そこからは四日市のほぼ全域がながめられる。目につくのは、伊勢湾沿岸に広がる石油コンビナート群である。銀色に輝く円型、円柱型のタンク、上下左右にはりめぐらされた大小さまざまなパイプ。赤い炎、白い煙を出しつづける無数の煙突。

この石油コンビナート群は多くの喘息患者や企業災害の源であったにもかかわらず、四日市繁栄の象徴として長年において賞賛され拡大されつづけてきた。昭和四十七年夏、四日市公害訴訟に対する判決以後、公にその社会的責任をきびしく問われはじめ、硫酸酸化物の総量規制をはじめとするさまざまな対策がとられるようになった。最近では、四日市で風邪や喘息にかかる人は他市なみになった、とまで言われた。たしかに大気汚染度はある程度減少してはいるが、目にみえないさまざまな有害ガスは煙突から休むことなく出

されつづけ、公害認定患者をはじめとし、呼吸器等に異常を訴える人は増えつづけている。

子どもや老人——なかでも体力の弱い者ほど大気汚染の影響を受け健康を阻害されている。園児にも、鬼ごっこで力いっぱい走ったりすると夜になって喘息が出て苦しんだり、鼻の粘膜が弱くて鼻血が出やすかったりする子はクラスに一人や二人はいる。健康な者でも夏が近づくと目がチカチカする光化学スモッグに悩まされたり、悪臭で頭痛を感じたりもする。

しかし、恐ろしい事に、「きれい」で、「おいしい」空気を味わって来た人には、四日市の空気は「きたなく」感じても、四日市の者にとっては「多少臭う日もある」ごく普通の空気なのである。保育者となってはじめて四日市へ来た時、鼻をつく臭いに驚いて「いやなおいがするね」と子どもに聞いかけたら、「なんにもにおわないよ」と返されて啞然とし

たが、七年たった今では自分もすっかりこの空気に慣れてしまった。

仰ぎ見て深呼吸をする価値のない四日市の空に「おいしい」空気の流れる日がこなければ、本当の人間の生活は送れないと思う。

私はいわゆる男性保育者である。幼児教育で重視されている幼児の気持ちや考えが理解できる保育者になることや、幼児の遊びが豊かになるような配慮のできる保育者になることの重要性を感じ、それなりの努力もしようとしているが、いつも大きな壁につきあたってしまう。そしてつくづく幼児教育は高度で微妙な精神的活動を要する広範囲な仕事だと思ひ、沈み込んでしまう。そんな時、せめて子ども達と愉快に遊び回ろうと戸外へ飛び出していく。あまりにその回数が多いので、私は子ども達と「戸外でよくあそぶ」保育者となってしまった。

四日市の空でも天気の良い日は見た目には美しいし、戸外は室内よりも気分がいい。たかたかとうばん、ひょうたん鬼、はじめの一步、陣とり、かんけり、宝とり、オリジナルの道鬼、野球ごっこ、ドッジボール、サッカーごっこ等々保育者主導型のきらいはあるが、子ども達も実に元気よく遊

ぶ。こんなに真剣に活動に参加し、喜ぶ子ども達の姿に接すると沈んだ私の心も晴れてくる。

ところが、身体を動かす戸外での遊びを離れるとやっぱり伝統的な真の幼児教育には七年たった今でも近づくことさえできないで悩んだのである。四日市の空気にはもう慣れてしまったのに。こんなにもむずかしい幼児教育に飛び込んだことに後悔さえするのである。しかし、最近私は自分の母のとうたある行動の意味を考え、一步ふみ出す立場でもう少しがんばろうと思うようになった。

一昨夏、岐阜の田舎で大病をした一人住いの母は、大きな病院もなかった事もあって、私達の住む三重の地へやってきた。一年程の入院・治療生活の後、多少回復し再び田舎へ帰って行った。時々私も遊びに行くが、母は世話になった事に感謝の気持ちをあらわしながらも、都会は「いきぐるしい」と言っている。田舎ほど人的なつながりのないあわただしい団地生活では「生き苦し」かっただろうし、空気の悪い都会ではまさに「息苦し」かったに違いない。

だがそれは都会に住みつづける私たちのような人間にはさほどにも感じない事なのである。

(四日市市立泊山幼稚園)

空・草・芽

村石京子

五月らしいものって何だろうかと編集会議で話題になったときに、この三つをあげました。五月晴れのぬけるように青い空を眺めていると、人間は本当は小っちゃくて大したこと出来ないでいるのに、そんな現実を忘れて、可能性がいくらでもひろがっていくような、希望もぐんぐんふくらんでくような伸びやかな心になってきます。日本は国土は狭いけれど、自然の恩恵はまだ残されており、四季おりおり変化に富んだ移り変りの見事さは私どもの心を豊かにしてくれるのに大きな役割をもっています。よく旅に出ると気分転換があるというのも、新しい土地へ行くからということだけでなく、人間が心に自然の影響を大きく受けることも意味しているのでしょうか。

その中でも五月は日本の風土からいって一年中で最も美し

い季節、生命あるものがみな成長していく、まるで自然の鼓動が聞こえてくるような時期です。輝く春の姿は、瀾漫と咲き競う花々やそこに群れて舞う蝶などに満喫することが多いのですが、一方今にもぼっこりと音を立てて開きそうに柔かくふくらんだ木々の芽や、陽さしをあびてまるで背のびしているみたいに伸びて青々とした草などには、これから育ってゆく幼児の姿と似かよったものを感じさせます。

そのこれから伸びていく春の息吹きみたいな子どもたちの集まる五月の保育室の中は、どんな様子でしょうか。前月は子どもにとっても保育者にとっても、新鮮さと不安と期待が交互に織りなした日々でした。多くのとまどいと緊張の連続の中に時が過ぎたようです。そんな思いのある日、ふと何か和らぎのある日を持っていることがあります。

例えば、昨日までポツンとたたずんでいた子どもがぎっか

けを見つけて友だちと遊びだして笑顔を見せてくれた日、乱雑に散らかった遊具を手伝って丁寧に片づけてくれて優しい気づかいをしてくれた子ども、そして今日は朝からずっと時間間の経つのも忘れ夢中になって砂場の山づくりのうちこんでいる姿の子どもたち等々、見つければたくさん出てくるでしょう。毎日毎日の保育の中に何かしら新しい動きが出てくる時ですし、その中に保育者の心を満たしてくれるものがあったりします。そして個々の子どもの新しい動きや変化とともに、あの手でばらばらだった思いの四月と比べて、級の中にどこか淡い連帯感のようなものが芽生えてきたり、つかの間の落ち着きなどを感じさせる日もあったりします。

教師自身の中にも一日をふりかえってみる気持や、子どもを離れた時間にも級の子どもの思い起こしてみるだけのつながりが少しずつ生まれてきます。けれど順調なくりかえしの日が迎えられるにはまだまだ日も浅く、こんなことでどうしようという日々の保育に行きづまりとあせりを覚える日も多いのです。子どもとともに過ごす大事な一日一日はやり直しができないけれど、でも決して方向づけをあせったり、小さなスケールにまとまってしまうまいようにと、保育の中に工夫

と変化の必要な頃といえましょう。

日々の保育に研究と反省とをもち、明日のために保育室での充分な準備と検討をし、そして一人一人の子どもたちのかかわり合いにきめ細かい配慮をすること等々みな大切です。でも澄みわたった空の青く広い日には、細かいことは一度全て忘れて戸外に飛び出してみるのもよいかもしれません。小さな摩擦や行きづまりは、大きな空の下では思いきりよく捨てられるかもしれませんね。

緑の草原にねころんで、どこまでも広い空を見ながら話をしあったり、歌を口ずさんだり、汗びっしょりになって追いかけてこをしたたり、ころころころがってあそんだり、みんな嬉しい五月の味わいです。

戸外にはおいに出て、五月の自然の恵みを身体一ばいに吸収し、大人も子どもも明るくさわやかになって新しい明日を迎えるために、小さなことによくよき心をもとうではありませんか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



「経 験」

村 田 修 子

今から二年ほど前に、「経験」という題の歌をうたって大ヒットをとばした歌手がいましたが、教育関係の本や話などではよく見たり聞いたりすることばが題になっていることは珍らしい感じでした。それがその年の大賞を受けたということは、うたった人の技術的なものが抜群であったことはいうまでもないことだと思いますが、それにも増してその歌詩の内容が全くその人が今迄に実際経験した事柄をテーマにしたものなのだそうです。ですからその気分というものは十二分に分っているわけで、それに音楽的なテクニックを加味させながら歌い込んでいたので、聞いた人をしびれさせるようなムードが生れてきて、多くの人達を感じさせたのだらうと想像されます。

子どもに關した話の内容としては、最近よくこのことばを耳にします。

私がこのことばを新しく、また感心しながら聞いたのは

女高師の学生時代の倉橋先生の「保育」のお講義でした。

自分たちの専門でない授業は合併授業で他科の人たちといっしょになって多人数でしたから、うしろの席で聞いて、今考えと申しわけないはなしなのですが他のことをしながら受けることが多かったのですが、倉橋先生の授業は各科とも、みんな先を争って前の方の席へ行きました。

それでも専門が違いますので、保育界における先生の偉大さ、というものを知つてのことではなかつたのですから、これも全く「あの時間は何かある」という学生自身の経験によつて、そうした行動をとつたことは間違いないのです。

それほど先生のお講義はすばらしく、引きつけられる何物かがありました。

「ここに一軒の白壁びんの土蔵の家があります。その壁はまっ白で何も書かれたりなどしていません。その白い壁に向

っている、子どもは壁がこう言っているように思えるのです。「ヤーイ、書けないだろう」そこで子どもは「なに、書けるんだから」そこで前に立ちただかっている白い壁をやっつけてやろうとしてそこに書くのです。壁が白ければ白いほど威圧されているように思うのです」倉橋先生の授業の様子を思い浮べますとこの話がまっ先に思い出されます。

大切なことを含ませながら、そしておもしろく、聞く者を夢中にさせます。余りおもしろいので書く手を休め聞き入ってしまいます。そうすると、その時間のたつのがとても早くてすぐ終りのベルがなります。ハッとして「何からこういうお話になったのだったかしら」と考えているうちに、先生はサッと本筋の話にかえられてまとめをなさるのです。その手際よさは目を見張るばかりで、「ああそうだった。このお話からああなっていたんだ」と毎回思ったものでした。

戦後幼稚園が再開されてすぐでしたが、週一回ずつ、「新教育」について計六十五時間の講義を持たれたことがあります。新憲法による解釈の仕方、新教育での大切な柱のことなど、分り易く解説されながらお話は進みまし

た。その中の一つに「経験させることの大切さ」について伺いました。

この項目の大切なことはお話を伺えば分りますし、字で書かれているものを読んでも分ります。そして分ったつもりになれるのです。けれども自分がやってみて「はじめてあれは分っていたつもりだっただけなのだ」ということが改めて分るのです。お話は何ったことによって、経験することの大切さの認識の裏付けをして頂いたように思いました。

いま目の前にいる一歳半の孫が、新しいものを不思議そうにじつとみつめたり、同じようにやってみようと息はずませているときの目の輝きの美しさや、どうして覚えるのか、止められたことはかくれるようにしていたずらをした、大人の心持ちや行動を期待していることが分る心の動きを見せてくれるなどの、私がもう忘れてしまっていた幼い時期の新鮮さを、再び経験させてもらって、その大切さを感じていまです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

大人になってゆく子ども

「赤ずきんちゃん」をめぐるって

津守房江

一枚の絵

グレッティングエルが、「自分に立ち帰るための自己対話」と言ったのは、幼ない子どものなぐり描きについてである。なぐり描きの時代から十二、三年たつて、子どもたちは、「子どもでもあり、大人でもある存在」となってきた。この子どもたちの絵を見ると、今のこの時期にも、絵は「自分に立ち帰るための自己対話」という言葉が真実だと感ずる。

社会や友人に対する外向きな目、それと同時に、自分は何かという内向きな目がある。絵の中で、音楽で、詩で、自分との対話をする。それだけに、子どもたちの絵は、以前にも増して大切な想いがする。私の立ち入ってはいけない気配を感じた時は、そのまま積んでおくが、子どもの方から、描き上げた絵を見せに来た時には、話し合っただけで楽しむ。こんな時には一人のひと、内的世界を共有する喜びを感じ、これを通

して、人間について少しく、学ばせてもらったことをありがたく思う。こんな中から一枚の絵をとり出して、大人になっていく子どもについて考えてみたい。

「ほら、どう？」と中学生の女の子が、今仕上げたばかりの様子で、一枚の絵を差し出す。画用紙を四つに折りたたみ、カードのようにしてある。その表紙の小さな画面に、色エンピツの柔らかな線で女の子が描かれ、背後に森がある。下の方に絵文字で、「赤ずきん」と書き入れてある。私はこの絵に見入りながら、その時ふと不思議に感じたことを、そのまゝ口に出した。

「この赤ずきんちゃん、ずきんをかぶってないのねえ」すると、「ほら、こうやって、ずきんを脱いで、背中のところにとらしているのよ」という返事だった。私は更にもう一つ、不思議に思ったことを尋ねてみた。

「赤ずきんちゃんは暗い森に行ったのだと思ってたけど、この絵はすい分明的い感じがするけど？」（実際オレンジ色と黄色で描かれたこの画面は明るかった）「ああ、物語っていうのは、その人の、ここからここまでを書いたものでしょう。（両手を広げながら）これはね、物語の終ったあとの、こここのところを描いたの」私は「物語の終ったあと」という言葉に、喜びを感じて、素直に思ったことを言った。

「この赤ずきんちゃんは、おかあさんや、おばあさんにもらったずきんを、後生大事にかぶってばかりいる赤ずきんちゃんでもないし、狼にそそのかされて食べられてしまう赤ずきんちゃんでもない。ちゃんと、うまく森から出てきたし、かりした利口な人なのね。何だか目がきょろつとして、いたずらそうで、あなたにそっくりじゃない」「本当にそう思う？ それじゃあ、これあげる。本当は誰かさんにあげようと思ったの」こうして、この絵は、私の手元に置かれている。

対話は、相手と向き合ったところで自然に出てくるものである。この時には絵と向き合ったところで、ふと私の口から出た言葉であるが、子どもにとっても、意識してこの絵を描いたのではないことが、私の言葉に、考えながら話す様子か

らうかがえた。絵の中で自分と対話するということは、意識的なことではなく、無意識をも含めた自分の内的世界に、語りかけ、語りかけられながら、凝縮した時間を生きることに思う。

赤ずきんを脱ぐ時

この絵を描いた頃、この子は何となく不機嫌でいらいらした様子が続いていた。その内容が何かは、母親にはよく分らないことである。ただこの絵を見た時、混沌の森の中から抜けたのだということを感じて、嬉しく思った。母親や、おばあさんにもらったずきんを脱いで立っていることも頼もしく感じられた。外からは何だか不機嫌だとか、不安定な感じとかに見えるような内的経過の後に、そこをつき抜け、明るい陽ざしの中にいる自分を感じる。自分でも気が付かない内に、ずきんははねのけられている。脱皮という言葉が、この場合にぴったりしていると思った。

脱皮ということは、中学生のこの時期のことだけではない。これまで、成長の時々に何かを「ぬぎ」、何かを「捨てる」ということがあったと思う。その中で印象深い出来事

は、この子が四歳七か月の頃のことである。一夏、一家で御殿場のコロニーで過ごすことになった。生活条件が厳しいので子どもたちに、何か好きなおもちゃを新しく買って行こうと思ひ、家中でデパートに行った。おそらく、この子にとつては、デパートは初めての経験だったと思う。

そのおもちゃ売場で、「これがいい？」と尋ねると、「ゼーんぶ」と答える。何度も歌うように「ゼーんぶ」「ゼーんぶ」と言い続け、長い時間の後にやっと、一つか二つのおもちゃを買った。疲れ切つて、家に帰つてみると、確かにかぶつていた帽子がない。大人たちが不思議に思つて話していると、「帽子捨てちゃったよ」という。「どこで？」「おもちゃ売場で。ゼーんぶ買つてくれなから」という言葉に、あつけにとられ、そのうちに何だかおかしくなつてきた。

初めて行つたデパートのおもちゃ売場から、何か一つ選ぶことは、この子には出来ない。一つを選ぶことは、他を捨てることである。そんなことは出来ないから、「ゼーんぶ」と言ったのに受け入れられず、一つか二つを除く殆んど全ての物を捨てなければならなかつた。私たちは、この子のために買った物のことを考へていたが、この子は捨てなければならなかつたことが心を占めていたのだと思う。いつもと

変りなく屈託のない子ども様子は、親に対する仕返しとは考へられなかつた。デパートのおもちゃ売場という新しい世界で、捨てる、という強烈な体験をした、その仕上げとして帽子を捨てたのではないか。

ではなぜ帽子を捨てたのだろうか。靴でもカバンでもなく帽子だったのだろうか。あの日かぶつていた帽子は、母親が日射病にならないように「つばの広い」という注文をつけて、祖母が買つてくれたものである。女の子におそろひは可愛いからという祖母の好みで、姉とおそろひで白に紺のリボンのついた上品なものだった。いわば、おかあさんと、おばあさんの想いのこもつたものである。

人が頭にかぶる物を考へてみると、社会的、文化的意味と、保護の意味とがある。この子の捨てた帽子にも、保護の意味と、少しばかり上品だとかおそろひだとかという点で文化的な意味があつた。冠、学帽、ベール、ずきん、等々並べてみると、ずきんは、保護の目的の強い物かと思う。地震にそなへての防災ずきんや戦争中の防空ずきんを思い出す。

赤ずきんちゃんの絵にもどつて考へてみると、母親の保護の象徴とも見られるずきんを脱いでしまう。何とせいで

と、心地よい風が髪に当ることであろう。髪を風になびかせることは本当に心地よいことである。ヘブル語でもギリシア語でも「風」は神の霊を意味するそうである。髪に風が吹くようにすることは、自然の力にゆだねることである。ずきんをしつかりとかぶせ、あまりにも風を防いでしまうことは、自ら伸びようとする力をさえぎり、偶然とも思える人との出会いを、妨げることであろうかと思う。

次に何を着るのか

おはなしの赤ずきんちゃんには、ずきんを脱ぐところはお出でこない。まして、赤ずきんの次に何を着るかについては当然触れていない。しかし現実の女の子は、赤ずきんをぬぎ、次に何を着ようか迷う。これは比喩として言っているのではない、「子どもでもあり、大人でもある」子どもたちの日常は、何を着ようかに強い関心がある、母親の手作りの服は喜ばれなくなり、「自分で買いに行く」と言いだす。母親の思いつかないような服を大胆に着てみる。自分がなろうとしているものについての模索を、具体的な衣服でやっているように思われるこのことは、この時期に際立っていることではあるが、同様のことは幼ない時から何回もあった。小学校に入る

学した兄の新しい服を一人で着てみている姿、父のネクタイをしめて歩いた日々、幼稚園の頃、赤ちゃんの飾りつき帽子によだれかけをつけて立っていた姿など、数えきれない程である。自分のなろうとしているもの、自分のなりたいたいものをここに見ることが出来る。

子どものぬいだ赤ずきんや、あのデパートで捨てられた帽子には保護の意味が強くあったことを述べた。けれども、保護ということだけではなく、大人たちには、おそろいの帽子はかわいとか、上品なデザインだとかいう多少の文化的な意味もあった。母親の保護の手を拭いのけると一緒に、これらもぬぎ捨ててしまう。親たちが、よいと信じて生きてきた生活文化を価値のないもののように無愛想に捨ててしまう。そして何かを求めて模索していく。長い時間かけて、自分らしいものを身につけていく。これらの行動の中に、自分自身の理想を生きようとする人間の、精神性の芽生えを見ることが出来る。

森と一本の木——生命性と精神性

子どもたちが、一步成長する前に見せる混沌とした状態は、森をさまよっていることになたとえられる。どんなふうに入

迷ったのかは、尋ねても答えは得られないだろう。そんな時、幼ない日の同種の出来事を思い起すことは、大きくなくてはからの出来事について考える助けになる。再び、デパートで帽子を捨てた時のことにもどってみよう。あの時、あれも、これも、全部はしい、と言ったことは、子どもらしい自然なことである。自分の心を、あるがままに生きる子どもの姿であり、そのことは生命あるものの生きる喜びとも言える。おもちゃ売場で、体中で喜びながらあれもいと飛びつき、またこれもいと飛びついていく。それはちやうど、赤ずきんちゃんが森の中で、花を摘んでいるうちに時を過してしまったことに似ている。明るい照明のついたデパートではあるが、自分が捉えられ、出口が分らなくなったという点で、森の中にはいったような状態だったのではないか。生命的であるということは、楽しく、豊かではあるが、時にはそれに捉えられて、抜け出せない危険性を持っているのではないか。昔話の知恵は、これを森に住む狼という形にして、私たちに示してくれているように思う。少女の生命力は、あれもこれもと受け入れていくが、木々の梢を仰ぎ見することを忘れ、混沌のまま出口を見出せない危険性がある。

このように、何でも肯定的に受け入れるのに対して、否定

の連続の出会いもある。あれでもない。これでもないと否定し模索する中に、やっと自分が求めているものが子ども自身にも見えてくる時がある。このような心の動きは、理想を求める精神的なものである。生命性を森にたとえるなら、精神性は一本の木にたとえられよう。あれでもない、これでもないと自己否定を繰り返しながら、螺旋階段を上るように次第に高みに昇っていく。梢に近づく喜びがあるが、また大地から離れ、生命性を失う危険性もある。このような性質を一本気というが、一本気は一本木に通じるのではないかと思う。

この子の描いた赤ずきんちゃんの森は、少女の背後にあり、明るく描かれている。だから何も心配することはないのだけれど、狼のその後については心に掛かっていた。狼という動物で示されるところのものが、自然のままの野性的なものを含んでいるとしたら、それまでも殺してしまうのは残念な気がする。また危険だからと言って森に近づかないのも、現実的ではない。どうやって森に近づき、狼と和解するか、どうやって生命性を豊かに保ちながら、精神性を伸ばすことが出来るか。これに対する答が、子ども自身の描いたその後の絵の中に少しく語られているのに気付いた。

「画面の中央に、少女らしい人物が立っていて、その左下に犬か狼のような動物が寄り添って立っている。そんな絵を何枚か描いている。この動物は大きく、なかなか精悍であるが、いい目をしている。森の動物がどういいう経過によるのか分らないが、ちゃんと少女の手の下に立っている。これが、完全な答とは言えないだろうが、この時の喜ばしい結果だった。

私は、先年マルク・シャガールの展覧会場で、またあの動物逢に出会ったように感じていた。美しい色彩の女性像のそばに、ロバか牛か、馬か分らない涼やかな暖かい目の動物である。その動物がシャガールの絵には度々出てきて、考えると不思議なことであるが、異和感を感じさせない。むしろ、その動物達によって存在感を感じさせられる。彼は晩年に「人間の創造」をはじめとする旧約聖書の連作に取り組むが、その中に、宇宙の中の人間、生命性と精神性の調和した素朴な人間存在を見るように感じた。

大人とは何か

赤ずきんちゃんを描いた時から、二年近くの時がたった。

街へ出た帰り道、並んで歩く子どもの口から「子どもが大人

になる。こんな当り前のことが、なぜこんなに困難なのか」と語られる。これは友人の言葉と言ったようにも思うし、その前にヘルマン・ヘッセの「デミアン」について話していたので、その冒頭の言葉をもじったのかもしれない。私は話を聞きながら、「子どもが大人になる」ということに心を奪われていた。私たち子ども派の間は、知らず知らずのうちに、「子どもとは何か」という問の中を生きている。しかし、その子どもは、今、大人へと最後のステップをよじ登ろうとしながら、「大人とは何か」と熱心に問いかけている。そのことに心を動かされながら、考える。

子どもたちが幼ない時、私たちは子どもが、土や水、太陽、風に触れ、自然のリズムの中で生きるように本気で努力した。子どもたちはよき友だちにも、よき年長者にも出会った。これらの人々は、風のように面白い友人だったり、おひさまのようなおじいちゃまだったり、宇宙の一部のように感じられていたように思う。今、大人に近づく子どもたちに、私の願っていることは、「人間」に出会ってほしいということである。自分の理想を育てるような、よき師、よき友に出会ってほしいということである。

ニューヨークの中の日本人(その二)

——子どもの世界——

佐藤 奈美子



新しい家

三人の子ども達をつれてはじめてケネディ空港に降り立ったのは、一九七三年六月のことでした。長女の真由美六歳十か月、長男浩史三歳十一か月、次男貴宏一歳六か月。この日から一九七六年十二月に帰国するまでの三年半を、私達はニューヨークの住人として過ごすこととなったのです。六か月前にすでに赴任して来ていた主人は家を探すのに大変苦労をしました。あはれん坊が三人居ては、日本でもアパート暮

しは気苦労の多いものですが、こちらの人は日本人以上に口うるさいとの事で、まずは高層アパートではだめ。一軒家はお家賃が高い。それで環境や学校、買物の便などをえ合わせて、クウィーンズ区のあるガーデンアパートの一軒を借りることになりました。ガーデンアパートとは、二階建て、或いは三、四階建ての家が横に長く連なっている建物です。近代的なアパートに比べると、建てられた年代も古く、建物自体はあ

まりきれいとは言えませんが、まわりの庭は広々としていて、自然環境には恵まれている所の多かったようです。住んでいる人達も、いたって庶民的でした。六月はニューヨークでも美しい季節でした。新緑が輝き、バラの花香り、高い梢では、早朝から小鳥の声ひびき渡り、広い芝生の間をリスがかけぬける。まるでボロ兵舎のようだと嘆く住人もありましたが、大きな自然に囲まれた、赤レンガのアパートは私も大いに気に入りました。地下室と一

階、二階、どんなにあばれても、階下からつつかれる心配のないこの古い家とまわりの環境を最大限に利用しながら、三人の子ども達も、それぞれの三年半を成長して行く事となったのです。

日本での六月は、まだ新学期の気分も新たな時でしたが、ニューヨークでは、まさに一年の終わらんとしている。丁度日本の三月のような時期でした。新入学で張り切っていた真由美は、ニューヨークで最後の十日間を通い、一年生を終わる事になってしまいました。六月二十一日から始まった夏休みは、九月九日まで。ニューヨークでの第一歩を、私達はまず夏休みから始めた、と言う事になります。

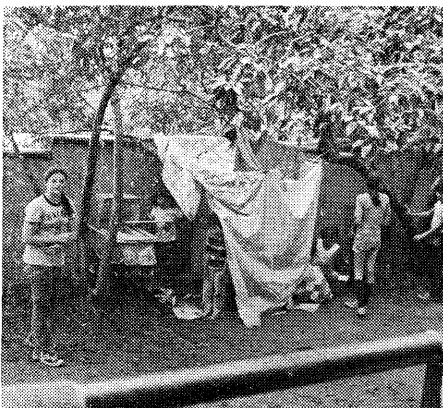
夏休み

ニューヨークには夏時間と言うものがあります。日が長くなると一時間時計を早めるのです。毎年大抵六月から始まって十月

まで。オイルショックで明けた、一九七四年には一月六日から始まりました。節電するなら他に方法もあるだろうにと思いがら、真暗なうちから起き出したものです。

こんな訳で、夏休みともなると夜は九時近くまで外が明るいです。その長い一日を子ども達は遊びました。宿題も無く、完全に勉強からは解放されて。

太い枝からは綱ぶらんこやタイヤがぶら下がり、ガレージの屋根の上では鬼ごっこ。隣家の物置小屋にまでとび移ってはどなられたり。木登りに恰好の木あり、おさるごっこ楽しいしげみあり。地下室にある共同洗濯場はオバケ屋敷、バラの花散る細い路地は女の子たちの「ひみつの小路」。遊具は何一つないのに、朝から晩まで子ども達の賑やかな声が絶えません。そして、私にも覚えがあるのですが、むしろのシートだの持ち出して来て、掘立小屋作り。恰好の枝ぶりの、りんごの木が数本あった



我家の裏庭は、夏の間中まるで難民部落でした。いつもはバレーボールや馬とびに興じている、中学生のお兄さんお姉さん達も、よく子ども達の仲間に入って来ました。小屋作りを手伝ってくれたり、鬼ごっこを一緒にやったり。小さい子ども達にとっては、肩車をしてもらって、その仲間に加えてもらうのが、何よりうれしいことで

した。

ある時、お兄さん達、スーパーマーケットのごみ捨場から木箱を持ち帰り、どこで見つけたか、壊れた乳母車を拾って来て車作り。その手元を期待に満ちた、真剣なまなざしで見つめる子ども達。ふと、日曜大工器用な、彼らのお父さんの姿を思い浮べたことあります。ここには昔懐かしい遊びがたくさん残っていました。

我家の三人は、と言えば、始めはもっぱら眺め役。終日戸口の石段に腰かけては眺めていました。もちろん、私をも含め、三人とも会話はゼロ。ABCも知らない状態でした。たまたま左隣が日本人家族で、同じ年頃のお友達があり、とてもよい通訳。彼女と遊びながら次第にみんなの中に入って行きました。もちろん自分からは何もしゃべりませんが、一緒になってかきまわっているのです。又、その頃、女の子達の間では、日本の「おちゃらか」のような遊びが

はやっていて、輪になっては歌を歌いながら手拍子を取っていました。そんな中に入って遊んでいるうちに、真由美は自然に英語を覚えて行き、夏休みの終わる頃には、彼女達としきりにおしゃべりを始めていました。

「イエス」「ノウ」「オッケー」と共に、まず出はじめたのが「ミイ」。ミイ (me) とは自分の事で「ほく」「わたし」とでも言うのでしょうか。「誰がするの」と言われて「ミイ」と言う具合。それを日本人の子どもは「ミイがする」「ミイの本」と言う風に、日本語の中に取り入れて使いました。

「ミッシー」(Let me see) —見せて、「ドンプッシュ」(Don't push) —押さないで、「アイウォンナプレイ」(I want to play with you) —遊んで、「カムヒヤ」(come here) —おいで、「ゲラルヒヤ」(Get out of here) —どいてなと、まず耳につき始めました。英語との出合いが、This is a pen.

であった私は、帰国するまで言語障害に悩まされ続けました。

真由美ほどにはすぐ友達の前になかった浩史、日本語すらしゃべるに至っていないかった貴宏は、時々道行く人に「ハロー、ハロー」と声かけるくらい。(アメリカのおじいさんやおばあさんは気軽によく声をかけてくれます) 近所の男の子に話しかけられると「英語じゃわからんヨ」と照れて逃げ帰って来てしまいました。そして、日本に居た時、同じような、ちび仲間と「仮面ライダーごっこ」に夢中だった浩史、相手を失ってひとりぼっち、手持無沙汰にテレビを見る事が多くなりました。

「アメリカのテレビ、怪獣いないからつまらない。日本のテレビ持って来ればよかった」と嘆くこと、嘆くこと。これは浩史だけではありません。幼い日本男児すべての嘆きでありました。それで一生懸命マンガ番組を探しては、ポパイだのバットマン

だのトムアンドジュリーだので、うめ合わせをしていました。こうして長い夏休みが終わる頃には、真由美はすっかり友達の中に入って行き、浩史はテレビっ子になっていました。

浩史、ナーサリー・スクールへ

一九七三年九月九日の朝、ぬけるような青い空、肌寒い空気が晩秋を想わせるようでした。うっそうと繁った並木道をトロトロと下ると、アパートの外れに、小さな木造の二階家があります。「コロンリアルプレイタイムハウス」。これが浩史の通うことになった幼稚園です。彼は夏休みの間に四歳になっていました。

我家の近所にはこの他にもいくつかナーサリー・スクールがありました。ナーサリー・スクールと言っても、独立した建物や庭を有する園もあれば、教会附属のもの、アパートの一室を借りているものなど形

も様々ですし、内容もいろいろでした。大抵スクール・バスがついていますから、片道一時間かかって有名校に通っている子どももたくさん居ました。まだ慣れない、事ではありましたが、歩いて五、六分、日本人も居ると言うことで、浩史はこの園に決めました。

英語が分からないからとか、お友達にいいじめられたらなど不安もありましたが、散歩の途中、柵の外から眺めていたぶんこや、砂場に寄せる期待も大きかったし、今日はお父さんも一緒に来てくれると言うので、いやがらずに出かけました。

小さなドアを開けると、まだ登園前か、静まり返った部屋の奥から、女の先生が出て来られました。入園させたい旨申し出て、手渡された用紙には、次のようなクラスがのっています。

週五日 午前と午後（オールデイ）
週三日 " " " "

週二日 " "
週五日 午前だけ 午後だけ（ハーフデイ）
週三日 " "
週二日 " " "

以上六つのクラスで、費用もそれぞれによって異なるわけです。今までこんな選択をしたことが無かったので、さてどうしたものかと思案した訳ですが、週五日の午前中に決めました。

二年後に貴宏を別のナーサリーにやった時には、隔日のハーフデイはとり止めになったとのことでしたから、どこでもこういうクラス分けをしていたと言う訳ではなさそうです。でも、どこにでも、オールデイ、ハーフデイ、隔日と言うクラスがあり、本来の理由は明らかではありませんが、親にとっては大層便利の良いものでした。高い保育料ですから半日にするとか、隔日にするとか。親の出かける曜日に合わ

せてオールデイにするとか、そして、まったく時間が取れるのは午後だから、午後のクラスの方が希望者が多いとか。年齢の小さい子どもだと、二日間のハーフデイから始めてだんだんに慣らして行くとか、いろいろな理由があったようです。

こんな手続きをしている間に、小さなスクールバスが着いて、十人程の子ども達が登園して来ました。長い夏休みを終えて、久しぶりに顔を見せたのでしょう、ひとりずつ先生からキスしてもらって入って来ました。日本人らしき子どもも三人。

子ども達は部屋に入ると、静かにテーブルに着き、作業を始めました。たくさん穴のあいた板に、小さな色棒をつきさして、いろいろな形作り。しばらくして、それが終わると今度は別のコーナーから粘土を取り出して来てねん土遊び。浩史もみんなの中に入れてもらってそろそろと手を動かしました。

最近の幼稚園と言えば、真由美の通った東京の幼稚園くらいですが、登園時の園と言えば、部屋の中でも外でも元氣一ぱい、賑やかな声に、はち切れんばかりだったような気がします。そんなものだと思っていました。でも、ここではみんながとても静かなのです。かけまわる子、大声を上げる子なんて、ひとりも居ません。それから後、いくつかの幼稚園や小学校で、室内では静かにするものという習慣を体験するにつれ、この静けさは当り前、驚くには当りないと言ったことが分かって来ました。この時にはびっくりしました。

この日は後からもうひとり、インド人の男の子が新入児としてやって来ました。それまで黙って粘土をいじっていた浩史、その子がお母さんに置いて行かれて泣き出すと、それにつられてしくしく。でも、そのまま園に残りました。

九月が一応新学期ではあるけれども、ナ

ーサリーは入園随時、それで九月に集中すると言う事もなさそうでした。月謝を納めるだけで、入学金もいらず、お道具類も制服も無し。着のみ着のまま、すぐその日からお預りしますと言う、実に簡単な入園でした。真由美が六月に始めて小学校に行つた日、ノート一冊に鉛筆、お弁当を持たせていましたら、事務室で手続きの後、すぐ教室につれて行かれそのまま三時の終了まで、けじめがはっきりしていると言うのか、ちょっと呆気ない感じでもありました。

落ちつかぬ午前中を過ごして、午後一時、玄関前で待っていると、数人の子どもを乗せた車が止まりました。浩史を降ろして、にこにこ先生、「よい子でしたよ」と。浩史も、今朝の泣き顔もどこへやら、早速報告です。みんなと食べたおやつも楽しかったようです。「ジュースくれたの。先生がね、英語でジュースのおかわりあげ

ましようかって言ったけど、ちょっと嫌いな味だったからもらわなかった。クッキーもくれた」

こうして楽しいナーサリー生活が始まりました。朝九時、家の前で車に乗り、一時、家の前で降ろしてもらう。隔日の子どもも居ましたから、その日によって人数もまちまちでしたが、二、三十人の子ども達だったようです。

この園では、親の参観は御遠慮願いますと言うことらしく、ついに一度も授業の様子を見る機会はありませんでした。一体何をしていたのやら、持って帰って来る作品で知るしかありませんでした。彼は大きなわら半紙に太い筆で絵を画くのが好きだったらしく、よく持ち帰りました。アルファベットのおけいこカードを作ってくることもありました。又、空缶、空びんを持って行くこともよくありました。初めのうちはそうした連絡は、送りの時直接先生が私に

伝えて下さいましたが、二か月程すると、浩史が聞いて来て、私に伝えるようになりました。「あしたレーヴェンいるみたい」とか「ブラウンバッグ持って来なさいって」と言う具合です。レーヴェンがリボンであり、ブラウンバッグがマーケットの紙袋である事など、私も彼と一緒に覚えて行くことになりました。

大体口は遅くて、あまりおしゃべりとは言えない浩史。「流れるってことはジャラジャラってなること？ こぼれること？」とか「なめるってことは、しゃぶるってことなの？」など、よく尋ねる頃でした。そして一時影をひそめていたどもりが又現われ始めていました。彼はもつと後になって、英語でしゃべるようになってから、英語でももつた時期があり、おもしろく思ったのですが、日本語ほどひどくはならず治ってしまいました。

恥ずかしがり屋も手伝って、相当長い間

イエス・ノウの首ふり人形だったようです。

ある時「Beautiful」ってどう言うことかな。浩史が絵を画く時いつも先生が「Beautiful」って言うの」と話しかけて来た時、その発音の美しさに思わずうっとりしたものでした。

(つづく)



M・J・ランゲフェルト講演集
「教育と人間の省察」

岡田渥美・和田修二監訳
玉川大学出版部

オランダの教育学者、ランゲフェルトは、現代のヨーロッパの知性を代表する人であり、新教育の指導者として活躍中の学者である。本誌の一月号に掲載された「行動の意味」の筆者、E・フェルメール女史と同じユトレヒト大学の名誉教授でもある。この書物は、M・J・ランゲフェルトが先年、世界新教育会議の折に日本に来られたときに、各地でなされた講演集である。

この書物のいたるところに書かれているように、教育は、子どもたちが「自己自身になってゆくのを専心助成する」営みであり、教育者は、「彼らが成熟した一個の人間存在としてそれぞれ固有の人

格を創り上げてゆくのに誠心誠意力を貸し与える」人であると言う。彼のことはよれば、「人間は単に外から形成されるのみならず、自らの内からも形づくられる」このような意味で、教育は「人を支配の対象とするがごとき力に對しては、絶対にこれを斥けることから始まる」のである。ヨーロッパの知性の伝統を身にしみこませた著者の一行一行のことは、ともすると、社会のもろもろの風潮にひきずられがちな私どもを、人間の尊厳に奉仕する教育へと、引きもどしてくれる力を持っている。「歴史には大いなる尊敬を、未来には大いなる深慮と責任感をもちつつ現代の課題に誠実に取り組むことのできる人」が、真に人間的な活動である教育に参与することができるといふ。現代の条件の中で、人間教育をいかにして遂行できるかを思索している書物である。幼児教育に關係する方々にも広くおすすめしたい。(津守真)

幼児の教育 第七十七卷第五号

五月号 © 定価二二〇円

昭和五十三年 四月二十五日 印刷
昭和五十三年 五月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

夏の ヨーロッパ 視察旅行 15日間

8月11日～8月25日



主催

フレーベル館現代幼児教育研究会

日本交通公社 関東団体旅行新宿支店

今年の夏、幼児教育発生の地

ヨーロッパを訪ねてみませんか。

フレーベル先生の遺跡（東ド

イツ）や、ベスタロツチ先生の

遺跡（スイス）を視察しながら、

ヨーロッパのメルヘンと自然に

触れる旅を計画しました。

経路

東京→アムステルダム→東西ベルリン→エルフルト→オーベルバイスバツハ→バートブランケンブルグ→リュースハイム→コブレンツ→フランクフルト→チューリッヒ→ウィーン→パリ
↓東京

期間

昭和53年8月11日～8月25日

人員

40名（定員になり次第〆切）

費用

五九八、〇〇〇円（ローン可能）

尚、詳細については、フレーベル館代理店又は、支店に資料をご請求ください。

お問い合わせ(TEL)は

- フレーベル館・東京03-二九二-7781
- 日本交通公社・東京03-三四六-0170

大きくのびのび遊ぼう!

フレール館の砂場用品



キンダー砂場セット(B)

キンダー砂場セット(A) 13,000円
 キンダー砂場セット(B) 8,500円

内 容	Aセット	Bセット
砂型(4種類) 黄・緑	20	16
シャベル 赤・青	40	20
フルイ ピンク	10	5
バケツ 赤	4	2
整理用カゴ 黄	2	2

●分売もいたします。

ます
 4個 1組 850円
 赤・黄・青・
 緑各1個

砂場用ジョウロ
 8個 1組 4,000円
 ピンク、グリーン各4個

連結汽車 1,200円

砂型トレイン 2,000円

砂ジョウゴ
 8個 1組 2,000円
 赤・黄・青・緑各2個

砂場用木製自動車セット
 2,300円

砂場用大型シャベル
 10本 1組 8,000円
 ブルー、
 オレンジ各5本

一輪車 5,200円

保育キャリー(B)
 14,600円

フレール館